

近代化する日本を生きた人間像

― 松下冷子「小品集」を読み解く ―

塩 野 和 夫

はじめに

二〇一二（平成二四）年八月三十一日（金）の夜七時過ぎに、玄関のベルを押す人がいる。「お母さん、クリーニング屋さんだよ」という私に、「今日は金曜日よ、クリーニング屋さんは土曜日でしょ」と答えながら、妻が玄関に出た。宅配便である。食堂兼私の仕事場に戻ってきた妻が手にしていたのは、松下冷子さんからの届け物である。早速開けてみると中から出てきたものの一つが、A四サイズの封筒に入った松下冷子「小品集」であった。

「小品集」の冒頭には、今回彼女の作品をまとめた理由が書いてある。

父母召天二十年、二十一年の記念会に合わせ子供六人が各々に過去に書き記したもの（主に戦争体験記）をまとめようとのことで、私は……今回の企画の主旨に添うものを抜粋してまとめる事にした。^①

「小品集」は、短歌と随筆の部から構成されている。作品の小見出しは、次の通りに付けられている。

短歌

「父の背」^②（十首）

「母のまなざし」^③（十首）

「湖の季」^④（二七首）

「過ぎし日 今」^⑤（三二首）

「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」^⑥（五首）

随筆

「世界に一つだけのプレゼント」^⑦

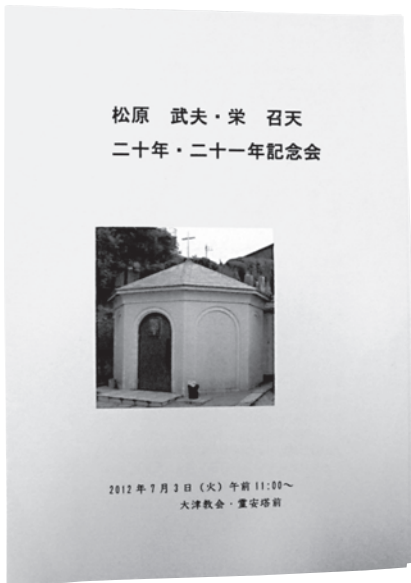
「二つの出来事」^⑧

「天津教会六十年記念に寄せて」^⑨（短歌三首）

「わたしの花人生」^⑩

「聖歌隊の思い出」^⑪

「草花への想い」^⑫



松原武夫・栄 召天 二十年・二十一年記念会
2012年7月3日 天津教会・霊安塔前

九月一日（土）に、「父の背」と「母のまなざし」から読み始めた。読んでみると、思い当たることがいろいろあって、何度も初めに戻るので先に進まない。ようやく「松原武夫さんの生き方が『父の背』の特色となり、同じように松原栄さんの優しさで『母のまなざし』は特色づけられている。それで、同じ著者なのに作品から受ける印象がこんなにも違う」と、妙に納得した。また、「これで感想文が書ける」と思い、ようやく先に進む事ができた。「湖の季」と「過ぎし日 今」は、自然の中に一体化する人間を謳っている。この傾向は随筆の「わたしの花人生」においてさらに鮮明で、花を介してつながる人と人の想いを語っている。そこでは、人は花とさえ会話を交わしている。花の人格化である。

九月二日（日）午後になって、ふと思い出して『追想』を取り出してみた。この本に収録されていた松下冷子「お父さん、お母さんの想い出」¹⁴を、読み直すためである。改めて読んでみて、愕然とした。この度の「小品集」と、二十年ほど前の作品「お父さん、お母さんの想い出」は、あまりにも違っている。二十年という歳月がもたらした、二つの作品の間に歴然と存在するこの違いは一体何なのか。それは、とても感想文で書ききれない内容ではない。二・三か月の時をかけて熟考し、まとまりを持った一つの作品に仕上げなければならない。その日の夜、松下冷子さんに電話して、「今回の作品はとても感想文では書ききれないので、二・三か月かけて一つの作品にまとめます」と伝えた。

第一章 松下冷子「小品集」解題

松原武夫（一九〇二—一九九二）と松原栄（一九〇七—一九九一）は、いくつもの戦争に翻弄されながらも、近代化する日本を生き抜いた。本稿は、松原武夫・松原栄の生き方を彼等の次女である松下冷子さんの「小品集」（二〇一二）を主要な手掛かりとする。考察にあたっては家庭と仕事、祈りと課題、喜びと悲しみ等が、具体的な日常性を伴って検討対象となっている。ところで、「小品集」における松原武夫と松原栄は、「お父さん、お母さんの想い出」（一九九五）と比べると、両者の人格に対する普遍化が無意識のうちにも明らかに進められている。ここに個別的な事例を扱いながら、それに「近代化する日本を生きた人間像」というタイトルを付けた根拠がある。そこでまず、松下冷子「小品集」の解題から始めたい。

第一節 短歌

（一）「父の背」⁽¹⁵⁾

萩こぼれ小紋のさまに石だたみメモとる老父ちちの頬も染まりぬ⁽¹⁶⁾（一九九〇年、長浜神照寺）

からくり人形の舞を撮らんと構える背傘寿の父のありし日なつかし（大津祭）

第一句は、熱心にメモをとる老父ちちの紅潮した頬を、萩の花びらで小紋の様になっている長浜神照寺の石畳と類比している。第二句は、十月十日に催される大津祭でこの年傘寿の父が、山車の舞台で繰り広げられるからくり人形

の舞を、懸命にカメラに収めようとする様子を思い出している。これらの短歌は、年老いてなお衰える事のない好奇心から、何事にも熱心に取り組んだ松原武夫を謳っている。

母を見舞い帰りゆく父後背ごせに十字架まみえし送り火の夜（一九九一年八月十六日）

「星に願いを」ハーブ弾き終え仰ぐ空百五歳百歳の父母の星瞬く

第三句は、無力感に打ちひしがれながらただ祈りを込めて妻を見舞い、帰る父の後ろ姿に十字架を確かに見たのは、大文字の送り火、母が天上に旅立つ前日だったと謳う。第四句は、ハーブで祈りを込めて弾き終えた「星に願いを」と、その時仰ぎ見た夜空に瞬いていた今は天上にある百五歳百歳の父母の星の瞬きを重ねている。これらの二句は、地上にあった日の父母の存在と、天上の世界を重ねて謳っている。その際に送り火や星が、両者のかけ橋となる。それ故に、歌い手は送り火や星に他に代え難い親しみを覚えている。

竜ヶ丘に父通いしと立つ夕べ茜さす比叡湖面ひなもに揺るる

学園に建つ父の句碑夜さの雨に黒くろと濡れ赤とんぼ一つ

天に立つ翠松あすなろのごとく伸びよと父の詠む湖望む学園のどよめきに

創立記念句碑緑陰に 三十年経つも父の字は湖みづの青

「父の背」(十句)で多く謳われているのは、教育者 松原武夫(四句)である。第五句は、滋賀女子短期大学学長を退任する(一九八四年三月)まで坂道を徒歩で通った父の姿を、キャンパスのある竜ヶ丘に立ち、夕陽に染まる比叡の影が湖面に揺れる様を見ながら、思い出し謳っている。第六句は、夜の雨で黒々と濡れている句碑とその前を飛ぶ赤とんぼを描き、色彩それと静と動の対比の中に、教育者の父を思い起こしている。第七句は、学園から響いてくる女子学生のどよめきに、彼女たちを教え諭した父の言葉「天に立つあすなろ翌松のごとく伸びよ」を語りかけている。第八句は、松原武夫の俳号竹生を句碑に刻んでいる湖の青と、句碑を覆う木々の緑とのコントラストによって、句碑を際立たせている。教育者松原武夫を歌う四句は、キャンパスの豊かな自然を色彩豊かに描きながら、句碑に刻まれた言葉「あすなろや 純美礼の園に 芽吹きつ、竹生」に思いを馳せている。

「平和記念日」と父言いてより五十年わが誕生日八月十五日
子々孫々に平和願いし父母に報告出来ずテロ爆破事件は



句碑の前に立つ松原武夫・栄
『翌松』より

第九句は、冷子の誕生日を毎年のように「平和記念日」と呼んだ父の意志的な生き方を、戦後五十年の八月十五日に、様々に思いめぐらしている。第十句は、地上にあった日の限り「子々孫々に平和を」⁽¹⁸⁾願う今は天上にある父母と、テロ爆破事件の痛ましさの間にあつて、言葉を失う著者の心を描き出している。平和を追求した父母を謳う二句は、彼等の強い意志に貫かれていて、抒情を交えていたこれまでの八句とは質を異にしている。

(二)「母のまなぶつ」

いくたびか待ち合わしたるホームに立てば肩越しの風母の香のする
大文字の送り火ひときわ赤く冴え母の温もりよみがえりきて

第一句は、何度となく待ち合わせたホームに立っていると、肩越しに吹いて来た風に母の香りがして、懐かしく母を思い出している。⁽¹⁹⁾第二句は、大文字の送り火がひときわ赤く冴えた時、母の温もりがよみがえって来て、しばらく母への想いにふけっている。これらの短歌は、肩越しの風や大文字の送り火から、感覚的に蘇ってきた母の香や温もりを謳い、母というかけがえのない存在の特質を浮かび上がらせている。⁽²⁰⁾

弾痕の古傷残る桐だんす捨て難くして母は逝きしか

節の川に癒されいしや「鴨川に似る」と母いい山口にくらしき

年重ぬることも恵みと笑みていいし母の意探る歯抜かれし夜

第三句は、弾痕の古傷で傷んだ桐だんすの前に座り、古くなった家具を大切に使い続けた母の想いを想起している。第四句は、母が言った「鴨川に似る」節ふしの川に彼女は癒されていたのだろうか、育ち盛りの子供たちを抱え、苦勞の多かった山口での生活に思いを寄せている。第五句は、齒を抜かれふと老いを感じた夜に、笑って「年重ねることも恵み」と語っていた母の言葉と、真向かいになっている。これらの短歌は、母の言葉や彼女が使い続けた生活道具から、思想とも言える生活者であった母の想いの深みを探っている。⁽²⁾

紫の鉄仙ほころべば画に描きし母のまなざし重なりて見ゆ

紫の鉄仙は小粋に八重の白はおしゃれに装う母思い出す花

母の愛でし鉄仙今年も咲き揃う逝きて十年語りたきこと多し

こぼれんばかり種を抱けるひまわりの花の笑えまいよ母の眼差し

鉄仙に母の笑む顔重なれりひまわりよりも鶏頭よりも（終戦六十年目の八月十五日）

第六句と第七句は、紫の鉄仙に母のまなざし（第六句）や、おしゃれだった母（第七句）を重ねて思い起こしている。第八句は、咲き揃う鉄仙、母の愛でし花を見るにつけて、もっと語りあいたいことがあったのにと、今更ながら母の存在感の大きさを感じている。第九句は、こぼれんばかりに多くの種を抱くひまわりの花に笑みを見て、それを母の眼差しと呼び、逝きし母と重ねている。第十句は、母の笑む顔が重なる鉄仙は、ひまわりよりも鶏頭よりもいとおしく思われると言つて、よみがえってくる母への想いのかけがえのなさを謳っている。これらの短歌は、

母の愛した花々、とりわけ紫の鉄仙に重ねて、彼女を思い起こし母の眼差しへのいとおしさを謳っている。

(三) 「湖の季」

四季折々に琵琶湖が見せる姿を題材にした「湖の季」に、松原武夫と松原栄は登場しない。それにもかかわらず、なぜ松下冷子は「父母召天二十年、二十一年」を記念する文集に、これらの作品を寄稿したのか。「湖の季」は、彼女の感性を豊かに細やかに育んだのは、「日々にする琵琶湖」であると雄弁に語っている。四季折々に琵琶湖が見せる姿は、いわば彼女の心を育てた原風景なのである。同じ真実が、松原武夫・松原栄にも当てはまる。⁽²²⁾ 松下が「湖の季」を記念文集に寄稿する理由は、ここにある。

(春を待つ時)

朝茜の湖に別れを惜しむごとピンクのベールまとう三日月

琵琶湖をサーモンピンクの風が掃きポンポン船の水脈ひきてゆく

落葉踏み病院へ通いし道の辺の淡く萌え初め湖開きの日

駆け上がる水鳥の舞園児らの歓声広がる春はそこまで

薄紅にかすむ湖畔の並木道足音と歓声のハーモニー響く(毎日マラソン)

第一句は、「茜の湖」と「ピンクのペールをまとう三日月」との色彩によって、情景を描き出している。同様に第三句も、「落葉」と「淡く萌え初め」る若葉の色を対照している。第二句は、「サーモンピンクの風」と「ボンボン船の水脈」という動きを描写している。第四句は、「水鳥の舞」と「園児らの歓声」という音を重ねて、そこから来ている春を謳っている。第五句は、マラソランナーの「足音」と観衆の「歓声」によるハーモニーで、湖畔の並木道をおおうにぎわいを表現している。これらの短歌は、琵琶湖が見せる色彩や音、それに人の活動を交えながら、春を待つ時の思いをにじませている。

(春)

立つ波の細波にかわる湖の季比叡の稜線おぼろにまろし

駆ける人そぞろゆく人桜風に吹かれ弾めり湖辺の道を

桜散る頃より芽吹き初むメタセコイヤ高だかとして湖畔を抱く

釣人も去りて一時鎮もりぬ比叡にぼつぼつ灯のともる頃

空の水色横縞に揺るる湖の青風花の奥に比叡の淡青

足裏に大地の温もりよみがえる夕映えの湖畔手を振り歩く

ゆるゆるとかすめる湖に船浮び茜に融ける稜線の色

第六句は、琵琶湖の「細波」とおぼろに見える「比叡の稜線」という情景を重ねて、春を演出している。第九句も、「釣人も去りて」鎮まった湖畔を近景とし、「ぼつぼつ灯りのともる」比叡の情景を遠景として、春のひとつ時を謳っている。第七句は、桜風に吹かれながら、湖辺の道进行い思に行く人を、第十一句は、大地の温もりを感じながら、夕映えの湖畔を手を振り歩く自分を描いている。第八句は、湖畔を彩る木々や花々が、桜からメタセコイヤに変わりゆく情景を、色彩豊かに描き出している。第十句は、「空の水色」と「湖の青」、それに「比叡の淡青」とそれぞれに趣のある青系統の色彩によって、春を捉えている。第十二句は、「ゆるゆるとかすめる湖」それに「茜に融ける稜線の色」と、のどかな色彩の特色によって春のひとつ時を表現している。これらの短歌は、琵琶湖とその周辺的情景、湖畔の木々や花々、湖畔の道を行く人々によって、琵琶湖の春を謳っている。

(夏)

雨上り鏡のごとく湖面光るビルも比叡も水底に高し
淡墨のペールはがして空と湖青それぞれの夏描きたし
湯水の水際賑わい静もれる琵琶湖が遠く小さく見ゆる (二〇〇二年、水位マイナス一五〇センチ)
涼風のたちはじめたり入道は西山に低しちぎれ雲走る

第十三句は、梅雨の雨があがったひと時に、鏡のような湖面に映ったビルや比叡を謳っている。第十四句は、もやがかりいつもの風景が見えない時の気持ち、題材にしている。第十五句は、湯水で小さく見える琵琶湖と、

水際が若者たちで賑わっている様子を重ねている。第十六句は、夏の終わりを告げる季節を、空に浮かぶ入道雲とちぎれ雲に見ている。これらの短歌は、夏の間にも様々な変化を見せる琵琶湖の姿を、梅雨の雨・もや・湧水・雲などによって、描き出している。

(秋)

なごり茜の空に山の端きわだちて迫り来るがに黒き比叡は(二階より)

防風林の間に湖の青深し低き太陽に紅葉つやます(二〇一〇年、長命寺)

七色の朧に明け初むしぐれ湖残る紅葉に寄り添い眺む

琵琶湖大橋真中より脚立つ虹の中車のシルエツト浮く一分のあり(二階より)

第十七句は、「なごり茜の空」を背景にして、存在感をもって迫る「黒き比叡」を、色彩豊かに描いている。第十八句も、「防風林」と「湖の青」、「低き太陽」と「紅葉つやます」様と、二つの眺めを重ねて色彩豊かな秋を湖の謳っている。第十九句は、時雨が残る朝のひと時、「紅葉に寄り添い」作者は、「七色の朧」に明け初む湖の様子に見入っている。第二十句は、「琵琶湖大橋真中より」くつきりとかかった「虹の中」を、大橋を走る車のシルエツトが通り抜ける様を描いている。これらの短歌はいずれも、なごり茜の空・黒き比叡・湖の青・紅葉・七色の朧・虹など、豊かな色彩を伴った景色を用いて琵琶湖の秋を謳っている。

(冬)

初冠雪の比叡茜に染まりたり淡青の湖にゆりかもめ見ゆ (二階より)

時雨する湖を抱き虹重ぬ遊覧船は浮き上り見ゆ (二階より)

雪積める伊吹大きく丸く見ゆ白龍のごとき湖北連山 (二〇一二年一月、二階より)

山肌はたかばねに似て厳しかり冠雪の比良蒼天を突く (二階より)

荒びたる湖に沈みし若人の「ロウ (Row)」とうかけ声水底ゆ甦る (今津にて、旧四高ボート部遭難の碑)

比叡おろし見面ざわざわ巻き上げぬ菜の花畑は雪におぼろに

見はるかす空 湖 比良の青三つ溶けず競わず眼の奥へ (二〇一〇年四月、二階より)

第二十一句は、「初冠雪の比叡」の白と「茜に染まり」たる赤、「淡青の湖」の青と「ゆりかもめ」の白、二重に色彩鮮やかな眺めを重ねながら、冬の到来を語っている。第二十二句は、初冬の「時雨する」湖とそこにかかる虹、それに「浮き上り」て見える遊覧船を謳っている。第二十三句は、「大きく丸く見ゆ」「雪積める伊吹」山の向こうに、真っ白で「白龍のごとき湖北連山」が聳えている様から、厳冬の厳しさを描き出している。第二十四句は、「蒼天を突く」「冠雪の比良」に、凜々しさを感じている。第二十五句は、冬の「荒びたる湖」を前にして、旧四高ボート部の遭難した学生たちに思いを寄せている。第二十六句は、早春の湖に吹く比叡おろしと、「雪におぼろに」なっている「菜の花畑」を重ねて、まだ厳しい寒さを描き出している。第二十七句は、早春に澄み切った空・湖・比良の青に見いる作者を謳っている。

(四) 「過ぎし日 今」

「湖うみの季とき」が、琵琶湖とその周辺の風景を謳っていたのに対して、「過ぎし日 今」は、作者の心によみがえる過去と現在の出来事を対象とする。したがって、生誕の地松江をはじめ、日立・山口・大津に暮らした日々の記憶、それに現在身近に起こっている事件や自然災害、さらに戦争などが題材となっている。

(主題)

暮れなずむ水面みなもに比叡ひゑささ揺れて過ぎし日のことわれに語りく

第一句で、作者は暮れなずむ湖面に映る比叡の揺れる影を見ながら、過ぎし日の出来事の語りかけに聞き入っている。甦る過去の出来事は、過ぎ去った日々の思い出ではない。それは現在を生き、未来を夢見る人々の心を作っている。だから、人は過去の語りかけに謙虚に耳を傾ける。

(思い出の地、記憶)⁽²³⁾

遠き日の淡海に住みし人びとの熱き眼差し今も豊かに

三歳の味覚おぼろにさぐりつつ宍道湖のしじみのみそ汁いただく

下唇きゅっとかむわが三歳の子の意地ありありと写真に(松江春日神社)

記憶なき生地松江市大橋は一本ならずも城閣の緑(一九八九年 旧制松江高校八十周年記念 父母と訪ぬ)

炸裂音火の玉闇夜に降り注ぎし九歳の夏記憶は確と（日立多賀）

疎開地にて誕生祝の大豆御飯金の粒ぞや一粒ひとつぶ（終戦の日 八月十五日）

すいとんに一つの玉子とき入れて家族で分かちし祝膳あり（山口）

円き卓袱台家族八人で囲みたれば賑やかかなりし一汁粗食（山口）

じっちゃん艦砲射撃にもあいしと 防空壕でわれは震えおり（日立多賀艦砲射撃の日 一九四五年七月十七日）

第二句は、「今も豊かに」語りかける「遠き日の淡海に住みし人びとの熱き眼差し」に、思いを向けている。第三句は、「宍道湖のしじみのみそ汁いだだ」きながら、「三歳の味覚」を探っている。これらの短歌は、「熱き眼差し」や「三歳の味覚」を手がかりにして、生誕の地における生活を、現在に思い起こそうとしている。第六句は、「九歳の夏」の「記憶は確と」刻み、第七句は、「大豆御飯」が「一粒ひとつぶ」「金の粒」であった記憶を、謳っている。これらは、日立市あるいはそこから疎開した地での、忘れがたい記憶や大切な味覚を心に刻みこんでいる。第八句は、「すいとんに一つの玉子とき入れ」た食事が、「家族で分かちし祝膳」であり、第九句は、「一汁粗食」も「円き卓袱台家族八人で囲みたれば」「賑やか」であったと、思い出している。これらは、戦後間もない頃に山口での生活は貧しかったけれども、家族団欒の豊かさがあったと謳っている。

（胸衝く歴史、そして東日本大震災²⁷）

沖繩の悲しみの歌声さとうきび畑に風起すざわざわわと（森山良子 紅白歌合戦）

テロありてイスラムのこと褐色のアフガンのこと知る胸衝く歴史を

生受けし月 母逝きし月 鎮魂のドームと向き合う重き八月

手も足も言葉も出でぬ映像にわが封印せしことつき破られぬ（二〇一一年三月十一日 大震災）

がれきの中くの字に曲りし桜咲く手を合わす人に一日添いたり

明治昭和チリそして壊滅の今世代の宿命と釜石の男

何ごともなかったような大海原水平線のカーヴいつもよりも（行方不明者二万人）

みちのくの風のそよぎに海山の還り立つまで生命つながん

星影に亡き人の面重ねこし逝く人の多き年なる暗雲の宙（放射能）

第十一句は、戦争による「沖繩の悲しみの歌声」が、「ざわわざわわと」「さとうきび畑に風起す」と謳っている。第十二句は、「テロありて」知った「イスラムのこと」「褐色のアフガンのこと」を、「胸衝く歴史」と呼んでいる。第十二句は、「生受けし月」「母逝きし月」を、原爆の悲惨と「向き合う重き八月」と、印象深く重ねている。これら三句は、いずれも戦争の悲惨さにおいて（思い出の地 記憶）とつながり、作者の胸を衝いている。

第十四句から第十九句は、二〇一一（平成二三）年三月一日に起こった東日本大震災と、震災後を生きる人々の姿を謳っている。第十四句は、映し出された映像の大震災が、「手も足も言葉も出でぬ」大変な力、人力の到底及ばない大災害であったとしている。第十六句と第十句は連作である。「じっちゃん艦砲射撃にもあいし」（第十句）は、「釜石の男」（第十六句）の言葉である。第十七句は、大津波による「何ごともなかったような大海原」に

おける「水平線のカーブ」が、「いつもよりも」少し大きく見える程度だったのに、あの大惨事との隔絶に言葉が失っている。第十九句は、「暗雲の宙そら」に放射能を思い、「逝く人の多き年」であった事実を思い起こしている。そのような中で、第十五句は多くの「がれきの中」で、「くの字に曲がりながら」花を咲かせる桜に手を合わす人に、一日思いを寄せている。第十六句は、「明治昭和チリそして壊滅の今」を、「世代の宿命」と受け止め、生きる「釜石の男ひと」を謳うたっている。第十八句は、東北の再生を見るまでは、「生命つながん」と強く願っている。東日本大震災で生じた多くの悲劇と、その中から生き抜こうとする人々の姿にもまた、作者にとっては（思い出の地 記憶）と重なってくるものがある。それだけに、東北地方再生への思い入れに深く強いものがある。

（人生の悲哀と希望⁽²⁸⁾）

手術控室の窓一面に黒ぐろと迫りかぶさる今日の比叡は（松下幸夫の腎臓摘出手術の日 一九九一年十一月）
湖の波七色に変わる虹を見し日ベッドの管一本抜ける（同右）

肯うづなえず言いいたる後の虚しさに足あもとの落葉の彩分いろかち合あう

ドレスの裳裾ももひるがえるように雲走るラストダンスに友は彼方へ（二〇〇七年六月）

マイガーデンの要となりて共に棲みしラベンダー枯れぬ二十年目の夏

ラベンダーのブーケ幾人に贈りしやのこり香にたつあの人あの時

がまんして追いかけて歩きしわが記憶真中の孫はしかと握くり来

発つ鳥の羽ばたきの舞見ぬままに孫と石投げ波紋作りぬ（暖冬で渡り鳥の飛来が少なかった年 二〇〇七年）

見えかくれしつVサインの子らの夢ひまわり畑のふところ深し

一本一本かぞえてみたくなるような比叡稜線の木の立ち姿（白内障手術後）

挿し芽してまた挿し芽して三十年紫鉄仙色濃く咲きぬ

いい風よ吹いて下さい迷わずに海に山に人にそつとそつと

第二十句は、「手術控室の窓一面に」「黒ぐろと迫るかぶさる今日の比叡」に、手術を待つ者の心境を語っている。第二十一句は、「一本抜け」た「ベッドの管」に、共感する作者の心を謳っている。第二十九句は、手術を終え快復した目に鮮やかに映る「比叡稜線の木の立ち姿」に、喜びを感じている。第二十二句は、気持ちの通じない「虚しさに」、「足^あもとの落葉の彩^{いろ}」を重ねている。第二十三句は、「走る」雲にかつてのダンスを思い出しながら、「彼方へ」去った「友」を思っている。第二十四句は、「マイガーデンの要となりて共に棲みしラベンダー」が、「二十年目の夏に」枯れてしまい慈しんでいる。第二十五句は、枯れてしまったラベンダーを前にして、そののこり香に「ラベンダーのブーケ」を贈った「あの人あの時」を、思い出している。第二十六句は、「がまんして追いかけて歩きし」「わが記憶」を、「真中の孫」が「しかと握り来^く」と記している。第二十七句は、「孫と石投げ」に夢中になっている様子を描いている。第二十八句は、「ひまわり畑」に「見えかくれしつVサインの子らの夢」を、思い描いている。第三十句は、「挿し芽してまた挿し芽して三十年」、今年も「色濃く咲きぬ」「紫鉄仙」に、明日の希望を見ている。第三十一句は、「いい風よ吹いて下さい迷わずに」と、人の世の希望を祈っている。これらの短歌で作者は、老いの悲哀を痛感しながらも、子らの夢や紫鉄仙に希望を見て、「いい風よ吹いて下さい」と祈っている。

(五)「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」(二〇一二年四月)

『金扇』の一語一句のわが胸に父母の刻まる今年金婚迎う

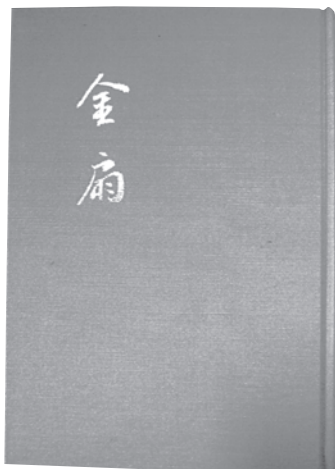
八十路まで竜ヶ丘上りし父の跡踏みしめ歩く導となして

母の描きし雛の画かけて二十年いよよ穩しきまなざしと思う

記念日に活け来し紫鉄仙の小さきつぼみに桜風やさし

黒の水脈引きつつ群れるかいつぶり淡雪遊ぶ夕照の湖

第一句から第三句は、父母の人間性や生き方を思い起こし、敬意を払いつつ「父母に習いたいものだ」と願っている。第一句は、『金扇』の一語一句から父母の息使い、優しさ、祈りを読み取るので、「わが胸に父母の刻まると謳っている。気がつけば作者も、父母が『金扇』を出版したのと同じ時にいる。第二句は、自らも老いを感じる年齢に達して、「八十路まで竜ヶ丘上りし」日々には、父の確かな生き方があったと察している。そこで、「父の跡踏みしめ歩く」ことが、「導」となる。第三句は、母からプレゼントされた「母の描きし雛の画かけて二十年」、その間目にしてきた「雛の画」ではあるが、二十年経って作者は、「いよよ穩しきまなざしと思う」⁽²⁰⁾。雛のまなざしに母の優しさが思い出されて、学びたいと念じている。



松原竹生・松原 栄『句集 金翁』
1979 (昭和54) 年

第四句と第五句は、作者が見つめ眺める自然に、父母を生かした世界を感じている。第四句は、毎年「記念日に活け来し」母の愛でた「紫鉄仙の小さきつぼみ」と、そこに吹く「桜風はなかせやさし」と謳っている。静である「紫鉄仙の小さきつぼみ」と、動きのある「桜風はなかせ」によって、母を偲ばせる優しい世界が演出されている。第五句は、父母も慈しんだ冬の夕暮れ時の琵琶湖に見た風景を、生命力のある「黒の水脈み引きつつ群れるかいつぶり」と、その背景にある「淡雪遊うそぶ夕照の湖」を、対比して描き出している。これらは、父母の優しさと生き方、それと彼らの愛した自然を謳って、「父母召天二十年二十一年記念云に寄せて」いる短歌である。

第二節 随筆

松下冷子「小品集」は、短歌と随筆から構成されている。ところで、「随筆」に含まれる作品は短歌集一編（短歌三首³⁰）を除いて、他の五編はいずれも「大津教会通信プニューマ」誌上に発表されている。しかも、これらの随筆はプニューマ編集者が企画した特集に寄稿された、という共通した性格を持つ。したがって、「随筆」に収録されている作品は、短歌集を含めて、教会生活と密接な関わりを持つ。このような基本的性格を踏まえた上で、作品六編を内容から三つに区分して解題を加える。次の通りである。

(一) 母の想い出

「世界に一つだけのプレゼント」

『大津教会通信プニューマ』（二〇〇四年十二月）、クリスマスプレゼントの想い出特集

(二) 教会生活における出来事

「二つの出来事」『大津教会通信プニューマ』(二〇〇六年七月)、大津教会の六十年 思い出のあの年特集

「大津教会六十年記念に寄せて」(短歌三首)『大津教会創立六十年記念誌』(二〇〇六年七月)

「聖歌隊の思い出」『大津教会通信プニューマ』(二〇〇七年十二月)、聖歌隊、クリスマス思い出特集

(三) わたしの花人生

「わたしの花人生」『大津教会通信プニューマ』(二〇〇七年七月)、この人特集

「草花への想い」『大津教会通信プニューマ』(二〇〇八年十一月)、聖壇のお花特集

(一) 母の思い出

「母の思い出」に該当する作品は、「世界に一つだけのプレゼント」だけであるが、ここには作者の心にずっしりと重いかけがえのない思い出が記されている。

一九四六(昭和二一)年に、松原武夫は旧制山口高等学校に赴任したので、同年十一月に、家族は茨城県日立市から山口県山口市に転居した。当時、松原家は子供六人を抱えた八人家族で、次女松原冷子は十歳であった。なお、山口市には一九五〇(昭和二五)年三月まで居住している。山口で一家は山口教会附属幼稚園の二階に借家して、松原栄は「生活の重荷にあえぐ」日々を送っていた。そのような中で、栄は「松原の両親、私の母が相ついで亡くなるが、「貧しさの為生活に追われお金もお米もなくて、家族を残して看病にもお葬式にも帰ることが出来」⁽³¹⁾ず、気がつけば台所で涙を流していた。

だが、まさにその山口で松下冷子は、「世界で一つだけの（何物にも代えることのできない）クリスマスプレゼント」を、母から与えられていた。

そんな頃の特別寒さの厳しい年のクリスマスの朝、枕元に置かれていたプレゼントはかけがえのないものでした。それは胸当に淡い黄茶緑のラインが三本入ったベージュ色のズボン（今風にはオーバーオール）で、それは軽くて軟らかく、凍えた体をふんわり包んでくれました。後々に母の婚礼のおりの特別な毛布だったと知り、一晩中ミシンをかける姿が眼に浮かんできました。六人の子供を養うため、父は大事な書物を、母は着物を手離しては食料に代えていた時代でした。

松下冷子の「世界に一つだけのクリスマスプレゼント」は、貧しさの為涙なくして生活できない日々、それでも松原栄が心をこめて夫と六人の子供たちを大切に守っていた姿を、具体的に伝えている。

（二）教会生活における出来事

「教会生活における出来事」を構成する「二つの出来事」（二〇〇六年七月）、「大津教会六十周年記念に寄せて」（短歌三首、二〇〇六年七月）と「聖歌隊の思い出」（二〇〇七年十二月）には、八つの出来事が記されている。「シニアチャーチのキャンプ」「金扇」を読む会「愛光ふれあいの家」「大津教会創立六十年記念礼拝」「改装」「中村牧師時代のクリスマス」「原牧師時代に始められた合同市民クリスマス」「近年の合同イブ礼拝」の八つであ

る。これらを時系列に並べて、松下冷子が経験した教会生活を概観し、その特色を考察したい。

松原武夫の滋賀大学学芸学部（現在の教育学部）赴任に伴い、家族は一九五〇（昭和二五）年四月に、大津市に転居した。当時、松原冷子は十三歳である。松原家は転居すると間もなく、家族そろって大津教会への出席を始め、同年に松原武夫・松原栄・松原茂雄（長男・幼児洗礼）・松原郁雄（次男・幼児洗礼）・松原景子（長女・山口教会で春名牧師より受洗）は、山口教会から大津教会に転会している。³²

滋賀県近江八幡市の佐波江で、大津教会のシニア・青年会キャンプ修養会が開かれたのは、一九五四（昭和二九）年八月一二日から一四日である。キャンプの主題は「献身」³³であった。高校二年生になっていた松原冷子もこのキャンプに参加し、キャンプファイアーで霊的な経験をして、「神の招きの声」を聞いている。³⁴なお、彼女はすでに一九五三（昭和二八）年四月五日に、大津教会のイースター礼拝で洗礼を受けていた。³⁵受洗前後から熱心に参加した教会活動の思い出の一こまに、中村利雄牧師時代（在任一九三三～一九六八）のキャロリングがある。一九五〇年代の大津の街には、まだ「華やかなイルミネーション」はなく、「満天の星空にひと際明るくい星」を見つめることができた。一九七〇年代の原忠和牧師時代（在任一九六八～一九七八）には、市内教会合同の市民クリスマスが始められ、聖歌隊に参加した松下冷子は「滋賀会館中ホールの舞台から天に届けよとばかりに賛美」した。

一九九一（平成三）年八月に、妻の松原栄に先立たれた松原武夫は、「目に見えて気力を」失っていく。そこで、松下冷子は「思いあぐねて、大平様、高槻様に相談し」、一九九二（平成四）年一月から二月にかけて、週一回始めたのが『『金扇』を読む会』である。この会は、「晩年の父を」元気づけた。その時の経験が、二〇〇一（平成十三年）に「愛光ふれあいの家」³⁶が誕生した折に、松下冷子の胸を熱くする。彼女は、「三年余りボランティアに参

加させていただいて、高齢者の方の生証から沢山の力をいただき、スタッフの方々の心のこもったサービスに深い感動を覚え」るのであった。二〇〇六（平成十八）年七月十六日に、大津教会は創立六十周年記念礼拝を挙行する。礼拝に参加した松下冷子が思いめぐらしたのは、「教会の礎となっている先達と未来に向かう教会」「改装された聖壇の花」⁽⁴⁷⁾「愛光ふれあいの家」⁽⁴⁸⁾のことであった。

近年のクリスマス行事には、「毎年趣向を凝らした子供の教会との合同イヴ礼拝」がある。礼拝では、「年齢を問わずイエス様のご降誕を心から祝う一体感にひたることができ」るのであるが、「孫の美優が今年（二〇〇七年）はマリアさんの役と知って、新たな思い出」が、加わりそうな予感を感じている。

松下冷子が語る「教会生活における出来事」を特色づける第一のものとして、靈性（スピリチュアリティ）がある。靈性は近年の人間理解において、身体や理性・精神と並ぶ重要な要素として注目されているが、松下の「教会生活における出来事」の基層にも、これはある。そもそも彼女が主体的な教会生活を始めるきっかけとなったのは、一九五四年のシニア・青年会キャンプ修養会における、靈的経験であった。中村牧師時代の一九五〇年代にキャロリングに参加し、「満天の星空にひと際明るい星」を見つけて心を打たれた経験や、近年のクリスマス行事で「年齢を問わずイエス様のご降誕を心から祝う一体感にひたる」合同イヴ礼拝も、極めて靈性に富んだ出来事である。第二に、共同体性という特色を指摘できる。原牧師時代の一九七〇年代に開催した市民クリスマスは、大津市内諸教会の協力によって可能となった催しであり、様々な層での共同体性が認められる。二〇〇一年の「愛光ふれあいの家」の誕生は、少子高齢化社会が抱える問題に、力を合わせて取り組もうとする人々による、共同体的性格を持つ事業であった。さらに近年の「毎年趣向を凝らした子供の教会との合同イヴ礼拝」も、共同体である教会

の性格をよく表現している。第三に、今日の社会において社会的弱者とされている高齢者が、抱えている課題との取り組みである。一九九一年に妻の松原栄に先立たれ、「目に見えて氣力を」失っていった松原武夫が、直面していた問題の一つに高齢化がある。したがって、『金扇』を読む会」は、高齢化に伴う問題を担っていた松原武夫を元気づけたのである。「愛光ふれあいの家」の誕生は、大津教会による高齢化という社会的課題との取り組みの表明、という意味を持つ。そこで、松下冷子が「ボランティアに参加させていただいて、高齢者の方の証から沢山の力をいただいた」経験は、教会の出来事であった。

(三) わたしの花人生

「子どもの成長と共に歩んできた私の花人生」は、「わたしの花人生」(二〇〇七年)と「草花への想い」(二〇〇八年)に凝縮して、記されている。そこで、松下冷子の花人生を折々の人々との出会いを横軸として加えながら、時系列で概観し、その上で草花によって彩られている彼女の人生の特色をまとめておきたい。

松下冷子が、「花と関わることになったきっかけは、長男の出産を機に大津に帰ってきたとき、一九六五(昭和四〇)年である。この時出会ったのが、「板倉宗太郎(宗悦)先生、きく様ご夫妻」³⁹で、彼らは「かれんなひなげしや淡紫の上品なしょうぶ(これを「大津京」と名付けて大切にしています)が咲いている」庭付きの家を世話してくれただけでなく、「先生が寒菊を挿し芽して下さった」。松下はこの菊を「宗悦きく」と名付け、「四十年以上特別な思いで挿し芽」している。「三年後、滋賀里の実家で年子の男の子二人の子育ての大変なときに、同居させてもらえたことで、また花を絶やさず咲かせ飾ろうという気持ち」が「生まれる。この時に松下は松原武夫・栄の配

慮の下に置かれており、とりわけ母として生活する松原栄から学ぶことが多かったであろう。しかし、草花を通して受けるばかりではなく、与える機会もあった。たとえば、「長男の愛光幼稚園の先生だった島村ゆき子さんの結婚式にブーケをプレゼント^⑩」している。三年後の一九七一（昭和四六）年に、松下家は「宗悦きく」と「大津京」を大切に運び、現住所の大津市鶴の里へ引っ越した^⑪。

その後、松下冷子は「イギリス帰りの新進の先生にめぐり会い」「輸入の珍しい花材を使って」「グリーンの使用方」や「自由で時には大胆なアレンジメント」、それに「花を切った後の茎や葉まで無駄なく足元に入れること」を教えられる。このようにして、「基本的には毎年種がこぼれ、宿根するもの中心のガーデンスタイルで、裏では半年先の花を育てながら、四季の花を絶やさず楽しめる」園芸生活を送っている。そのような折に、浜本さん^⑫から「ぼつぼつ聖壇のお花を代わってください」と声をかけられたのは、一九九〇（平成二二）年頃である。現在も聖壇のお花を担当する一方で、教会バザーに備えて「半年も前から挿芽したり移植したポット苗が」、松下家の庭の隙間を埋めている。「昨年（二〇〇七年）のバザーで五〇円玉を大事そうに握っていた男の子がお母さんとハーブの苗を買ってくれました」。松下は、大切に育てた苗の巣立ちを嬉しく思い、また母を思う男の子の優しさに気持ちと和むのであった。ただし、近年の異常気象により日本の美しい四季が崩れていくスピードを憂慮して、彼女は焦りを覚える日々をすごしている。

草花を育み過ごしてきた松下冷子の草花観は、「草花への想い」の末尾に置かれた短歌（三首）に、よく表現されている。

賜りし季よもぎ穂やかにうつろわず花のつぶやきはほろほろこぼる

挿芽して種をこぼして共どもに活かさるる夢かなえたまえや

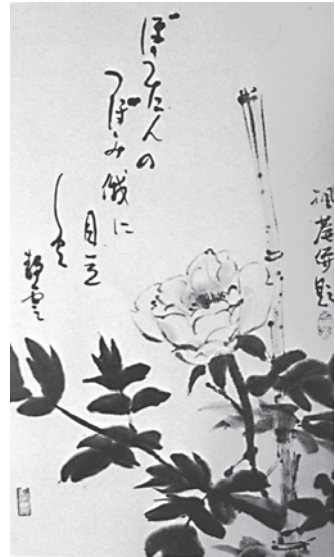
手をつなぐように地を掴み根をはれる草のたくましさ子らにあれかし

このように大津への転居（一九六五年）以来、四十年以上に及ぶ松下冷子の花人生に認められる第一の特色は、それが人との真心の行き来する場であった事実である。真心の交流の一つは、松下が「受ける」という形をとる。板倉宗悦きく・松原栄・イギリス帰りの新進の先生・浜本さんから、様々な形で彼女の花人生は受けている。もう一つは、「与える」という形式である。嶋村健治・大原ゆき子の結婚式や、浜本さんのお孫さんと越智先生のお嬢様の結婚式で、プレゼントしたブーケ、教会バザーで男の子が買っていったハーブの苗、何よりも聖壇のお花当番で、松下は花を通して真心を与えている。

第二の特色として、花を介して真心の伴った交流が行き来する所に生じる、いわば花の人格化がある。典型的な事例は、松下が「宗悦きく」と名付け、「四十年以上育てている赤黄白三種類の寒菊」で、二〇〇七年にも彼女は「特別な思いで挿し芽」している。言うまでもなく、板倉宗悦・きく夫妻は四十年以上前大津へ転居した時に親切に世話してくれた人たちであり、その真心のしるしが「宗悦きく」と呼ばれる寒菊である。だから、松下が大切に「宗悦きく」の世話をする際には、彼らの温かい真心が思い出され、彼女は感謝の思いを込めて「宗悦きく」の手入れを続けるのである。ここにおいて、松下にとって寒菊は単なる花であることを超え、「宗悦きく」として人格化している。



板倉宗悦
『開八記念 板倉宗悦作品展』(1977)より



「ぼうたんのつばみ俄に目立ちしく」と
書を添えている

板倉宗悦の墨絵「牡丹」
1977(昭和52)年制作
『開八記念 板倉宗悦作品展』より

そこで、第三の特色を読み取ることができる。松下は彼女の花人生において花の声を聞き(「わたしの花人生」末尾の短歌第一句)、花に自分たちの夢を重ね(「わたしの花人生」末尾の短歌第二句)、子らに草花の逞しい生き方を習ってほしいと願っている(「わたしの花人生」末尾の短歌第三句)。

注

- (1) 松下冷子「小品集」一頁
- (2) 「父の背」(松下冷子、前掲書、二頁)

- (3) 「母のまなざし」(松下冷子、前掲書、三頁)
- (4) 「湖の季」(松下冷子、前掲書、四一六頁)
- (5) 「過ぎし日 今」(松下冷子、前掲書、六一八頁)
- (6) 「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」(松下冷子、前掲書、九頁)
- (7) 「世界に一つだけのプレゼント」(松下冷子、前掲書、九一十頁)
- (8) 「二つの出来事」(松下冷子、前掲書、十頁)
- (9) 「天津教会六十年記念に寄せて」(松下冷子、前掲書、十一頁)。なお、この作品は短歌であるが、一連の随筆の項目の中に掲載されているので、それに従った。
- (10) 「わたしの花人生」(松下冷子、前掲書、十一一十二頁)
- (11) 「聖歌隊の思い出」(松下冷子、前掲書、十三頁)
- (12) 「草花への想い」(松下冷子、前掲書、十三一十四頁)
- (13) 松原武夫・栄遺族一同『追想』一九九五年
- (14) 松下冷子「お父さん、お母さんの想い出」(松原武夫・栄遺族一同『追想』一三三—一四七頁)
- (15) 「父の背」「母のまなざし」「過ぎし日 今」では、類似したテーマの短歌を解説のためにまとめた。そのため、当初の順序を入れ替えている。
- (16) 一九九〇年に、松原武夫が萩の花を謳った俳句がある。
萩咲きて囲む灯籠みえかくれ 竹生 『追想』二六頁
- (17) 句碑「あすなろや 純美礼の園に 芽吹きつつ 竹生」は、滋賀女子短期大学後援会によって一九八〇年春に設けられ、「あすなろの植樹と句碑」の披露式が挙行された。
参照、松原武夫「新入生を迎えて」(『翌松』四五—四七頁)
- (18) 松原武夫の平和に関する思想と立場は、次の論文にまとめられている。
松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』六六—八五頁)
- (19) 松原栄にもプラットホームを詠んだ俳句がある。
故郷の無人の駅やかなな咲く 『翌松』一六四頁
無人駅の桜吹雪に別れけり 『金扇』一七六頁

(20) 乗りおくれ電車待つ間の日向ぼこ 『金扇』二〇〇頁
松原栄が、母を思い出し詠んだ俳句がある。

初夢の母若くして微笑めり 『翌松』一八九頁

更衣母の形見のつづれ帯 『金扇』一八二頁

亡き母の齢となりぬ更衣 『金扇』一八三頁

桔梗好き母の好みし花なれば 『金扇』一九三頁

鉄線のむらさき母の帯の色 『追想』十一頁

なお、第三句に関連して太平洋戦争中に過ごした茨城県日立市での生活の様子については、次の個所で触れている。

『追想』五一―五三頁

(21) 松原栄が、「母の想い・鉄線の花・生活者の姿」を詠んだ俳句がある。

(母の想い)

夏草や母の嘆きのいくさ橋 『金扇』一八七頁

(鉄線の花)

せがまれて子猫もらひぬ鉄線花 『翌松』一五一頁

鉄線のむらさき母の帯の色 『追想』十一頁

(生活者の姿)

日野菜漬くことも師走の仕事かな 『翌松』一五五頁

初釜や荒れたるままの手を膝に 『翌松』一五九頁

針供養針一筋に生きぬいて 『翌松』一五九頁

(22) 松原武夫と松原栄も、琵琶湖を題材に俳句を作っている。

『翌松』より

松原武夫

矢車のふと廻りそむ湖の風 八〇頁

雲海の割れて眼下の竹生鳥 八三頁

道鏡に映る木槿や右は湖 八四頁

斑猫や峠来ゆれば湖展け

八四頁

初鴈の一線翔くる湖の朝

八五頁

湖わたる雁の一声夜のしじま

八九頁

舩押し暮れゆく湖に櫓のきしみ

九七頁

花火果て湖畔に波の音低し

一〇二頁

初雁や志賀の宮址を湖へ

一〇四頁

秋晴やヨット近づきまた離れ

一〇五頁

寒月や湖にネオンの影ゆらぐ

一〇八頁

梅雨の雲比良をなだれて湖昏し

一一六頁

子を抱き親子の仰ぐ湖の虹

一三二頁

銚竝ぶ湖の通りや鰯雲

一三六頁

比良晴れてびわ湖大橋しぐれ虹

一四四頁

松原 栄

湖へひとすじ道や鰯雲

一五四頁

近江路と名付けし菓子や湖の春

一五九頁

師の句碑に湖のひらけて朝櫻

一六二頁

朝な朝な見慣れし湖の初日出

一六九頁

帆をおろしヨット眠れり浜大津

一七三頁

はろばろと行く雁追ふて湖に佇つ

一八〇頁

夫傘寿湖のかなたに遠花火

一八二頁

鳴鍋や玻璃戸の外の湖の月

一八五頁

フェノロサのこよなく愛でし湖の春

一八九頁

雪ひだの輝く比良や湖開き

一九〇頁

金雀枝の角を曲がれば湖見えて

一九一頁

風立ちて湖みはるかす萩の上

一九三頁

湖はるか右も左も虫時雨

湖見えて志賀の百穴草紅葉

一九三頁
一九五頁

『金扇』より

松原武夫

花びらの上りつ落ちつ湖青し

老木に縫れる葛や湖の風

竹生島淡く暮れゆく法師蟬

高く低く鎮もる風に湖風げる

初明りほのほの見ゆる湖の橋

湖の朝日に映ゆる若葉かな

湖に高さ競へるうなり風

吹雪来て大橋半ばかくれけり

冬木立映ゆる湖畔の捨小船

暮れて着く遊覧船や花の雨

元火受くびわ湖祭の乙女たち

湖に放つ子亀や夕霞

雨やんで虹の立ちたる竹生島

葦の穂や湖に立つ芭蕉句碑

名月や湖畔に波の音低く

鱚雲近江大橋の渡り初

湖見ゆる日吉の馬場の照紅葉

夕茜湖わたりゆく雁のあり

朝靄に鳩水走る膳所の浜

吹雪去りびわ湖大橋月淡し

藤棚をくぐれば湖の展げくる

十五頁
十五頁
二二頁
二七頁
二八頁
四〇頁
四八頁
五〇頁
五二頁
五八頁
六一頁
六二頁
六七頁
七〇頁
七一頁
七一頁
七三頁
七五頁
七七頁
八一頁
八三頁

- 夕焼やポブラ並木の果の湖 八九頁
終戦の黙祷ささぐヨットかな 九一頁
どことなく湖面明るき無月かな 九二頁
初雁や志賀の宮址を湖へ 九三頁
たまゆらに鳴の遠音や湖風きて 九八頁
舟水漬くままの湖辺や虎落笛 九九頁
びわ湖大橋ゆたかに反りて冬うらら 一〇〇頁
湖見えて若葉並木のつづきけり 一〇八頁
柿若葉舟舳ひるし沖の島 一〇九頁
湖望む白壁の学舎風薫る 一一三頁
釣人の影ゆらゆらと芦の風 一一九頁
舳竹を並べし浜や冬うらら 一二二頁
凧や空罐まろぶ湖畔道 一二二頁
冬うらら湖の波紋は何処より 一二二頁
比良の雪照り戻りして湖暮るる 一二五頁
湖平ら堅田のあたり鳥曇 一二五頁
夕霞帰帆の船の笛太し 一二六頁
夕桜木の間にかかる湖の月 一二七頁
老鷺や湖を真下に横川道 一三三頁
湖見ゆる古墳の道や女郎花 一三五頁
残る虫湖を見て行く横川道 一四二頁
風花やかがよふ湖に吸はれゆき 一四四頁
炎天や湖畔にひびく杭打機 一五二頁
喜寿の春妻は古希なる湖の庵 一六二頁
片端の大橋に濃き湖の虹 一六四頁

松原 栄

犬ふぐり湖見ゆる畑仕事

一七三頁

湖の志賀の山並笑ひけり

一七五頁

湖を真下に眺め新茶摘む

一八〇頁

丘の上の泡立草や湖見えて

一九四頁

『追想』より

松原武夫

初明り空と湖ひびくごと

七頁

初明り湖一線かがよひて

八頁

芒穂をわけて通れば湖みゆる

二六頁

無月なりどこかほのかに湖明り

二七頁

初明り湖一条のかがよひて

二九頁

松原 栄

淑気満つ空と湖との逢ふところ

七頁

初日さし湖かがよいて近江富士

八頁

小春日やあるかなきかの湖の風

十六頁

月食や湖面もしほしほのぐらく

二六頁

(23) 松原武夫と松原栄が思い出の人々を詠んだ俳句がある。

松原武夫

八鬚の父を偲びて墓洗ふ

『翠松』八八頁

ただ一度父と岩梨採りし日よ

『翠松』八八頁

古里の駅長老ひて百日紅

『翠松』一一六頁

亡き母と共に来し徑曼珠沙華

『翠松』一一七頁

形見なる手編のセーター寒波来る

『翠松』一一九頁

白菊の遺影は語り語りかけ

『翠松』一三九頁

父母を心に呼びびて墓洗ふ

『金扇』 十七頁

無人駅友と別れし夕桜

『金扇』 一二八頁

松原 栄

母の忌や蠟梅庭の片隅に

『翠松』 一四九頁

母の日や母の遺せし翡翠玉

『翠松』 一六一頁

母偲ぶ手打ちの蕎麦や大晦日

『翠松』 一六五頁

蠟梅に卒寿の友の訃報さく

『翠松』 一六九頁

兄逝くや故郷の庭の落椿

『翠松』 一七七頁

山菜莢の黄色眼に沁み忌の明ける

『翠松』 一九七頁

卯の花に父の忌日のめぐり来し

『金扇』 一八二頁

亡き人の風情ただよう玉椿

『追想』 十六頁

(24) 松原冷子は一九三六(昭和一一)年八月に松江市で誕生し、一九三九(昭和十四)年三月まで過(こ)している。

(25) 松原冷子は一九三九(昭和十四)年四月に茨城県日立市へ転居し、一九四六(昭和二一)年十月まで過(こ)している。

(26) 松原冷子は一九四六(昭和二一)年十一月に山口市へ転居し、一九五〇(昭和二五)年四月に滋賀県大津市へ転居するまで山口で過(こ)している。

(27) 松原武夫と松原栄に戦争と原爆の悲惨さを詠んだ俳句がある。

松原武夫

秋光や原爆の子の千羽鶴

『翠松』 一二〇頁

慰霊碑に薰煙たえず夕紅葉

『翠松』 一二〇頁

行く秋や原爆ドームの夕鳥

『翠松』 一二一頁

芋蔓の粥を分ちて終戦日

『翠松』 一三三頁

新年の空をよごすな放射能

『金扇』 二九頁

松原 栄

天へ向く大輪の夕顔終戦日

『翠松』 一九三頁

鎮魂のコーラス響く原爆忌

『追想』 十一頁

(28) 松原武夫と松原栄に老いの悲哀と若者への希望を謳った俳句がある。

松原武夫

稲妻や手術の峠越へにける

『翠松』一〇二頁

孫好むトンカツ甘し若葉風

『翠松』一一八頁

大志抱き逝きし青年天高し

『翠松』一一八頁

共に見し孫はいま亡く花に佇つ

『翠松』一二八頁

いざさらば別れの庭にばらの花

『金扇』一一七頁

船上に別れの宴や夏の望

『金扇』一一八頁

病院の人みないねて遠蛙

『金扇』一二九頁

春蟬や休養時間の患者たち

『金扇』一二九頁

静養の妻に摘まむと花一つ

『金扇』一四五頁

向日葵のごと燃えつきて逝きし女

『金扇』一五二頁

いとけなき手に供花一つ墓詣

『金扇』一五三頁

病院の闇のしじまや虎落笛

『金扇』一六一頁

病良しカナリヤ肩に日向ほこ

『金扇』一六一頁

幾山河越えて五十年沈丁花

『金扇』一六三頁

春暁やインマヌエルの五十年

『金扇』一六三頁

子も孫も十二人なり筆の花

『金扇』一六三頁

春立つや別れし人の眼の光

『追想』二二頁

点滴の命しずかに花の夜

『追想』二二頁

夾竹桃の白きを好み老ひしいま

『追想』二四頁

除夜の鐘身にしみ聴くやわが米寿

『追想』二九頁

翠松や純美礼の園に芽吹きつつ

『翠松』三頁

ユースホステル歌声わたる星月夜

『翠松』八六頁

春暁や今日を門出の竜が丘

『金扇』 十五頁

乙女らに希望ヶ丘の雪柳

『金扇』 五六頁

空仰ぐ乙女の像や糸柳

『金扇』 五七頁

湖望む白壁の学舎風薫る

『金扇』 一〇九頁

松原 栄

退院の夫を迎へて石路の花

『翠松』 一五五頁

再手術かなはぬ椿散りにけり

『翠松』 一六〇頁

病床に座して聞きをり遠花火

『翠松』 一七三頁

待宵やひそかに抱く願ひ事

『翠松』 一七四頁

花の宴秘めし悲しみ胸にあり

『翠松』 一八一頁

星祭る老には老の願ひあり

『翠松』 一八二頁

青春を残して孫逝く秋の風

『翠松』 一八三頁

十三夜形見の翡翠ペンダント

『翠松』 一八三頁

龍胆に喪服の女身じろがず

『翠松』 一八三頁

入院のわれに届きし年の豆

『金扇』 一七〇頁

看護婦の水仙挿して立ち去れり

『金扇』 一七一頁

針供養する針もなく老いにけり

『金扇』 一七一頁

梅ふむ部屋に折鶴そのままに

『金扇』 一七二頁

病院の日脚伸びたる夕餉かな

『金扇』 一七二頁

観梅を約せし人も病むたより

『金扇』 一七二頁

見舞とて雛の色紙の添へられし

『金扇』 一七二頁

小さき指開けば落つる土筆かな

『金扇』 一七三頁

風花の窓華かに病みてをり

『金扇』 一七四頁

雛流し女の願こもりゐて

『金扇』 一七四頁

肩寄せて老いたる夫婦花の下

『金扇』 一七五頁

春雷や遠く離れし友の計を

『金扇』一七六頁

友逝きて喪服の肩に花吹雪

『金扇』一七七頁

椿落ちおもはぬ人の計報きく

『金扇』一八〇頁

髪洗ふとほしき髪の手にからみ

『金扇』一八六頁

マスカット癒えぬ病と知らずして

『金扇』一八八頁

鶯草や育てし人は既に亡く

『金扇』一八八頁

君逝きて遺せし筆や吾亦紅

『金扇』一九二頁

喪の家に丹精の牡丹咲きつづけ

『追想』十一頁

教会の葉桜のかけ車椅子

『追想』十二頁

小さきほど愛しきものよ赤のまま

『追想』十四頁

針らしき針も持たずに針供養

『追想』十四頁

ねぎごとを今も抱けり天の川

『追想』十八頁

露添へて季節にはえり病人食

『追想』二二頁

花の日や加茂川べりを退院す

『追想』二二頁

養生のためや今宵の冷奴

『追想』二五頁

世ばなれの病室ひとりそぞろ寒

『追想』二八頁

療養の眼にはまぶしき石露の花

『追想』二八頁

除夜の鐘身にしみ聴くやわが米寿

『追想』二九頁

みどり児の声をわが家にクリスマス

『翠松』一七六頁

校門のしだれ桜に子ら遊ぶ

『金扇』一七六頁

初夢や湖かがやきて傘寿の帆

『追想』七頁

乙女らのおでん屋台や学園祭

『追想』九頁

冬うらら嬰児のめしい笑み浮べ

『追想』二十頁

- (29) 松下冷子は、松原栄の形見の画を季節毎に、和室に掛けていた。雖の画は毎年二月半ばから三月半ばの作品である。
- (30) 「大津教会六十周年記念に寄せて」(短歌三首)は、次の著書に掲載されている。日本キリスト教団大津教会、二〇〇六年
- (31) 参照、松原栄「私の信仰の歩み 松原栄」(松原武夫・栄遺族一同編「追想」四四―六四頁)。なお、山口時代に松原の両親と自分の母親の看病にも葬儀にも出向けず、気が付けば台所で涙を流していた逸話は、松原栄さんから筆者がしばしばうかがった話である。
- (32) 参照、松原栄「私の信仰の歩み」(「追想」五六―五七頁)。大津教会史編集委員会編『大津教会史』日本基督教団大津教会、一九六九年、二三八頁。
- (33) 参照、大津教会史編集委員会編、前掲書、三四頁。
- (34) 松下冷子は、「二つの出来事」に短歌二編を載せている。
モノクロの小さき写真に若き日の出会いと導き凝縮さるる
松わたる風ひたひたと波寄する浜佐波江に神の招きの声す
- (35) 参照、松下冷子「大津教会の歩みの中で育まれて」(大津教会史編集委員会編『大津教会五十年誌』三二六―三三〇頁)。大津教会史編集委員会編、前掲書、三一・三三九頁。
- (36) 「愛光ふれあいの家」について、元森淳子は「愛光ふれあいの家の歩み」(日本キリスト教団大津教会 創立六十年記念誌編集委員会編『創立六十年記念誌』六六―七十頁)で、次の通り報告している。
- はじめに 超高齢社会を迎え、人々の老年期の過ごし方が社会的問題になっている。高齢者が住み慣れた自分の家で、友人・知人のいる土地で、人間として尊敬され、心豊かに晩年を過ごせるように、また介護している家族の負担が、たとえ一時でも軽くなるように、教会が支援活動することは、①地域のニーズに応え、地域に開かれた教会となる。②間接的に伝道活動の一助となる。以上の考えから「愛光ふれあいの家」は生まれた。
- 「愛光ふれあいの家」誕生まで 教会の社会奉仕部の二〇〇〇年度の取り組みは「高齢社会を考える」であった。前年度に大津市が開催した「宅老所・グループホーム開設講座」を受講していた中西、元森は高齢者の支援活動を教会がする意義を社会奉仕部に訴え、宅老所開設を働きかけた。社会奉仕部は、近隣の宅老所を見学したり、積極的に検討を始めた。二〇〇〇

一年四月教会定期総会にて宅老所開設に賛同を得られ、開設準備は社会奉仕部からプロジェクトチーム（梅田久子、遠藤ノリ子、桐村剛、中西敏子、前田飯津子、元森淳子）に移行した。

宅老所の名称は教会員に投票で決めてもらった。場所は愛光センター小ルームと和室を使用することになり、トイレの改修は、宅老所開設のための匿名の献金二百万円と不足分は教会会計から補われて出来た。営業日時は毎週金曜日九時から十五時まで。利用料は食材費を入れて一回一五〇〇円と決まった。

役割分担は、リーダー・元森、会計・桐村、送迎・主として前田が担当、梅田、藤田（啓）が協力した。給食・中西、レクリエーション・遠藤、梅田となった。

「宅老所愛光ふれあいの家」事業開始 二〇〇一年六月二四日開所式。初日は三人であったが、徐々に増えていった。事業内容の主なものには①楽しみづくり②健康維持の支援③教会員と愛光幼稚園児との交流など内容の濃いものとなる。また、選ばれた食材による手作り昼食とおやつは好評であった。

同年、「おおつげんきくらぶ助成金」を応募して採択され、二〇〇一年から三年間助成金をもらえる事となった。毎年ヒアリングで査定され二〇〇一年は四十万円、二〇〇二年は九十万円、二〇〇三年は七十五万円であった。

初年度は教会からの補助もあり、順調に経過していたが、将来のことを考えて特定非営利活動法人格の取得、指定通所介護事業所を目指すことを二〇〇二年度定期教会総会に提案した。

提案理由 ①教会の財政を圧迫することなく、この事業を継続する。 ②質の良い安定したサービスの継続（後輩育成）
③利用者の経済的負担を軽減する。

総会で承認されたので、教会員を対象に法人会員を募集して四八名の入会者があり、二〇〇二年六月特定非営利活動法人設立総会を開催した。理事には梅田久子、遠藤ノリ子、桐村剛、杉本淳子、武田栄夫、中西敏子、前田飯津子、望月修治（当時の大津教会牧師、現在は同志社教会の牧師）、元森淳子、監事には松下冷子、藤田啓子が就任した。

二〇〇二年十一月十一日、法人が成立した。通所介護事業所の認可を目指して準備を開始。その一端として、二〇〇三年八月から営業日を週二回に増やしたり、事業所開設資金の足しにするためにスタッフの手当てを一部凍結した。

しかし、この間に事業所になるには週三二時間以上の営業が義務付けられていることが判明した。教会でこれ以上回数を増やすことは不可能であり、事業所開設が暗礁に乗り上げた時に利用者の家族（杉本氏）から「市内ナカマチ商店街に適切な場所がある。設備費は自分と家主（寺田氏）で負担するから是非開設してほしい」と申し入れがあった。場所は菱屋町、新築の高齢者専用賃貸マンションの一階部分である。家賃は一年間は半額の十万円、二年目からは二十万円。内装費が要ら

ないのなら介護保険の事業収入で運営可能と考えて、理事会を経て十一月に法人臨時総会開催、事業拡大が承認された。

新設事業所の名称は「愛光ふれあいの家ナカマチ」とし、所長には前田飯津子が当たることにして、認可を取得する準備と開設準備に全力を注いだ、同時に内装工事が進んでいたが、内装費は杉本氏の予想を超えて八八二万円となり、その中の五八二万円は杉本氏が負担するが、其の内二八二万円は「愛光ふれあいの家マカマチ」が開業後に杉本氏へ返済していく事になった。残りの三〇〇万円はスタッフ達が個人的に用立てた。

設備費が無いために備品(家具・事務用品・台所用品・什器・リネン類等々)の殆どを教会員に献品して頂き、お陰で利用者を迎える最低の準備は完了した。

通所介護指定事業所「愛光ふれあいの家ナカマチ」開設 二〇〇四年三月二三日、望月牧師ほか教会員の出席を得て開設式。二四日通所介護指定事業所の認可が下りた。三〇日、行政の関係者・民生委員・地域の代表者を招いて開所式。

四月一日から定員十名、週六日のデイサービス事業を開始した。センターにおける宅老所事業は休止にし、利用者は全員「ナカマチ」へ移行、介護保険を利用していない人も自費扱いで「ナカマチ」に来てもらった。

高齢者の人格を尊重したパーソナルなケア、昼食とおやつは手作り、専門知識や特技でユニークなサービス内容、立地条件を生かした取り組み等でケアの質の向上に努め、口コミで利用者も標準的な伸びを示した。

二〇〇四年五月三〇日定期総会を開催。赤字の収支決算を見た教会責任役員から、閉鎖を勧告された。

理事会に諮り、前半期の収支決算を見て今後の方針を決めることが承認された。スタッフは手分けして積極的に広報活動を再開して利用者の獲得に務めたが、赤字減らしにはつながらなかった。

十月上旬二〇〇四年度の第二回目の理事会を開催し、前半期の収支決算書を基に事業の継続か否かを検討した。二〇〇五年度から家賃が倍になること、人件費の捻出が困難であること、近隣に同業者が増えており、これ以上利用者の著しい伸びは期待できない、したがって累積赤字減少の見通しがないことから閉鎖も止むを得ないと決まった。

「愛光ふれあいの家ナカマチ」閉鎖 十一月三十日をもって事業所閉鎖。理事会で閉鎖が決まった後は、利用者への影響を配慮して、所長は家族、担当ケアマネージャーとの綿密な連携をとり、利用者関係の事後処理に当った。事務処理・物品処理後十二月中旬、ナカマチを引き上げた。

二〇〇五年一月十六日、法人会員一同に閉鎖に至る経緯を説明して了解を得た。

「特定非営利活動法人宅老所愛光ふれあいの家」解散 二〇〇五年三月二十日、臨時総会を開催して通所介護指定事業所を閉鎖したので、法人組織を維持する必要がなくなったことを説明して、解散が決議された。

おわりに 少子・高齢社会の問題点を踏まえ、今後の教会の在りようをも考えた事業であったが、通算わずか三年と五ヶ月で閉鎖せざるを得なかったことは痛恨の極みであった。原因は経済的基盤がなかったこと、シミュレーションに甘さがあつたと考える。また教会の事業でありながらNPO法人のため「大津教会立」と明言できず、教会員の事業に対する認識に影響を与えたであろうことは否めない。利用者のほとんどは家族から大切にされているが、寂しい思いをしておられる。他者との交わりが生甲斐につながり、外へ出て行くことは健康保持に役立つことを実感した。短期間であったが利用者に親しみと心地よい時間を提供できて、家族や周辺からも高い評価を頂いたことは、やはり教会の事業ならでこそと思う。

紙面の関係で個人名は省略させて頂いたが、多くの方々の献身的な協力で沢山の献品のお陰で運営できたことを心から感謝すると共に、目的が達成できなかったこと、多くの協力者の期待に添えなかったこと、また、多額の負債を残し迷惑をかけたことを申し訳なく思っている。

私たちは、人生の先輩たちに接し、また沢山の方々の出会いから多くのことを学ばせて頂いた。三年余りの間に他教会から乞われて話に行ったり見学を受けた。わずかでも役に立ったら幸いである。

(37) 大津教会の創立六十周年にあたっての改装工事の内容について、堤武雄「創立六〇周年記念事業について」(日本キリスト教団大津教会 創立六十周年記念誌編集委員会編、前掲書、八〇―八二頁) は次の通りに報告している。

本工事 ①礼拝堂正面壁改修 ②天井の改修 ③礼拝堂腰壁塗装 ④教会木製扉の開閉調整 ⑤教会門札の更新 ⑥牧師館門扉更新 ⑦週報ボックスの更新 ⑧教会外壁塗装 ⑨幼稚園屋根塗装
追加及び付帯工事 ①教会玄関ホール天井、壁塗装 ②幼稚園壁天井塗装 ③教会センター間の扉新設 ④二階幼稚園教室壁塗装 ⑤幼稚園二階非常扉の新設 ⑥教会スロープ玄関つり戸ガイドレール新設 ⑦教会掲示板更新 ⑧センター教会渡り廊下柱塗装 ⑨幼稚園庭入り口廊下シート貼り付け ⑩センター郵便受け更新 ⑪幼稚園庭側看板の更新
(38) 松下冷子の「大津教会六十年記念に寄せて」(短歌三首) は次の通りである。

礎に先達の顔浮かびたりインマヌエル六十年経て大津教会なお新し
改装に聖壇の花匂いたつヴォーリズ建築の面影いまに
高齢の人の笑顔に励まされ三とせの交わり力となりて (愛光ふれあいの家)

(39) 板倉宗太郎（宗悦）と板倉きくには、次の作品がある。

板倉宗悦「開八記念 板倉宗悦作品展」一九七七年

板倉宗悦「中村牧師との花縁」〔『大津教会史』一八八一—一九〇頁〕

板倉きく「坂本伝道に思うこと」〔『大津教会史』一二七一—一二九頁〕

なお、板倉宗悦について記した次の作品がある。

塩野和夫「私の宝」（一人の人間に）六七—六八頁

(40) 愛光幼稚園の教員であった大原ゆき子は、一九七〇年十一月十五日に大津教会で嶋村健治と結婚式を挙げている。参照、『大津教会五十年誌』三四七頁

(41) 松下幸夫・松下冷子夫妻は、一九七一年四月に京都教会（大山寛牧師）から大津教会に転入会している。

参照、『大津教会五十年誌』三四七—三四八頁

(42) 浜本環には次の作品がある。

浜本環「婦人会」〔『大津教会史』一二九—一三二頁〕

浜本環「トニー先生」〔『大津教会史』一三六—一三七頁〕

浜本環「私の信仰の歩み」（大津教会『私の信仰の歩み』第一巻、一九八五年）

第二章 松原武夫・松原栄小伝

松下冷子の「お父さん、お母さんの思い出」（一九九五）と「小品集」（二〇一一）は、明確な対象を持っている。この具体的な対象への思いや思索を時間をかけて巡らすことによって、これらの作品は昇華されていった。したがって、二つの作品を深く理解するためには、具体的な対象すなわち松原武夫と松原栄に関する考察が不可欠となる。

幸い、松原武夫と松原栄によって生前記されたいくつかの作品が残っている。彼らについて記したものである。次の通りである。

松原武夫

- 「自然科学教育と科学史」(『滋賀大学研究論集 第二部 自然科学』第二号、一九五三年、八七―九五頁)
- 「自然科学の成立と経験論」(『滋賀大学学芸学部紀要 自然科学』第三号、一九五四年、七七―八二頁)
- 「Hypotheses non fingo」に就て(創刊十周年記念号)(『滋賀大学学芸学部紀要 自然科学』第十号、一九六〇年、一三―一三九頁)

『金扇』(一九七九年、松原栄との共著)

『翌松』(一九八四年)

「大津教会史の諸断面」(『大津教会史』一九六九年、一七二―一七五頁)

「私の信仰の歩み」(大津教会『私の信仰の歩み』第一卷、一九八五年)

「子々孫々に平和を」(『大津ロータリークラブ年報』

一九八七年度、『追想』一九九六年、六五―八五頁)

松原 栄

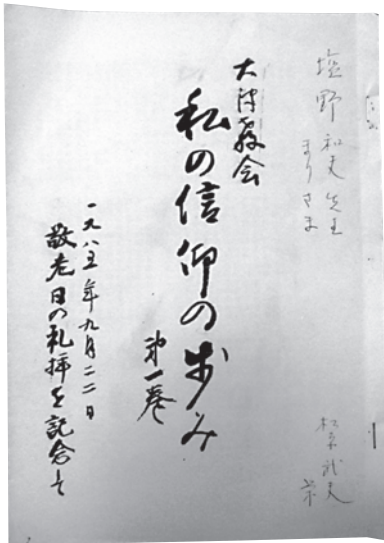
『金扇』(一九七九年、松原竹生との共著)

『句集』(『翌松』一九八四年、一四九―一九七頁)

「共済会のこと」(『大津教会史』一九六九年、一四

二―一四五頁)

「私の信仰の歩み」(大津教会『私の信仰の歩み』第



大津教会『私の信仰の歩み』第一卷
1985年9月

二巻、一九八六年、二十一―二六頁)

松原武夫・松原栄について記した作品

「第二部 父母の思い出」(『追想』一九九六年、八

九―二〇三頁)

「第三部 寄せられた言葉」(『追想』一九九九年、二

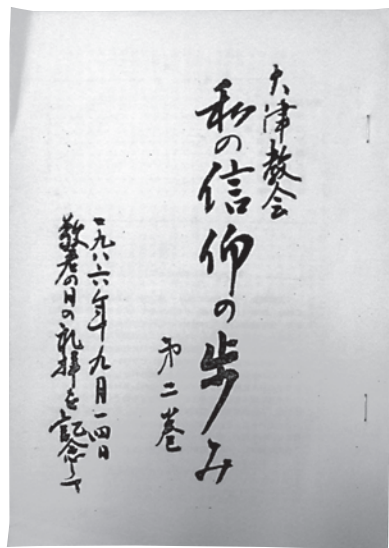
〇七―二七九頁)

松原武夫と松原栄の作品で、最も多く残されているの

は俳句である。俳句は、折々の彼らの心の動きを知るに

は有益であるが、人間像を全体的に探る作業には適していない。松原武夫には、いくつか彼の思想に触れる作品もある。⁽⁵⁾しかし、これらも彼の全体像を示すには至っていない。そこで、彼らの全体像に迫り得る試みとして考えられるのが伝記である。ただし残された資料から彼等の伝記を再構成するためには、近代日本史における位置づけや地域社会との関わりなど、いくつか不十分な側面もある。

そこで、必要な点を補いつつ彼らの人間像に迫るため、第二章では、「松原武夫・松原栄小伝」に取り組み。



大津教会『私の信仰の歩み』第二巻
1986年9月

第一節 自我の形成

(一) 摇篮の地、近江八幡

近江八幡は、一五八五年に豊臣秀次が築いた八幡山城の城下町として整えられ、江戸時代には商人の町として栄え近江商人を生んだ。明治期になると、八幡山の城址を北に望み、整然とした碁盤の目のような街並みを持ち、東海道本線の近江八幡駅は、町の中心部から南へ一、五キロメートル程離れた場所に設けられた。商人の町として進取の気風に富む近江八幡は、教育にも熱心で明治期にすでに県立の商業学校と女学校を設立している。明治期に活動を始めたプロテスタント・キリスト教は、一九〇一（明治三四）年には近江八幡組合教会を設立している。一九〇五（明治三八）年に来日したW・M・ヴォーリズ（William M. Vories 一八八〇—一九六四）は、一九〇七（明治四〇）年に八幡基督教青年会館を、一九一一（明治四四）年にはヴォーリズ建築事務所を建設している。

松原武夫は、一九〇二（明治三五）年八月二十日に教育者であった松原廣吉とちよの次男として神崎郡小幡（現在の東近江市）に生まれ、近江八幡で少年期を過ごした。日中戦争に勝利した日本が、強力で富国強兵政策を推し進め、日露戦争に向かっていた時期である。幼少より聡明で、何ごとにも強い好奇心と責任感を示した性格と地味で堅実な生活態度には、幼少期をすごした近江八幡の地域性による影響が認められる。ところで、幼少期の武夫は、必ずしも壮健ではなかったと思われる⁶。そもそも「武夫」という名前からは、「健やかな成長」を願う両親の願いが読み取れて、彼が両親の熱い愛情を受けて育った事実を推測させる⁷。母親のちよから武夫は、常々「食べ物もしっかりと噛み、ゆつくりと食事をするように」と躾けられている。地元の小学校を卒業すると、武夫は四十分間汽車に乗って旧制膳所中学校に進学した。膳所中学校ではボート部に所属して、「尻の皮が擦り剥ける」まで練習⁸

に励んだ。琵琶湖は武夫が青春を謳歌し、友情を交わした場所であった。そんな武夫にも合宿中に途方に暮れてしまった逸話がある。「ボート部の連中が早食いで、ゆっくり食べていたら飯が残っていな」かったのである。仕方がないのでボート部の合宿中だけは、彼も母の教えに背いて仲間と飯の早食いをしてしまった。

北川栄は、一九〇七（明治四十）年十月十二日に教育者であった北川辰次郎とゆうの長女として、滋賀県の志津村（現在の草津市）に生まれた。一九〇五（明治三八）年に日露戦争に勝利した日本が、大正デモクラシーを開花させていった時代である。この頃になるとキリスト教会は漸く地域社会での立場を獲得して、文化的活動などの担い手として受容されている。近江八幡においては、近江兄弟社が近江八幡組合教会にもまして、欧米文明の文化や教育活動を地域社会に力強く発信していた。父の転勤に伴って北川栄は近江八幡に移り、地元の小学校と女学校に学んだ。その十年間に彼女が強く影響を受けたのは、伝統的な近江八幡の文化ではなく、近江兄弟社や教会から受けた新しい文化であった。すなわち、教会主催の映画会や八幡基督教青年会館における英語の手ほどきと親睦会・ガリラヤ丸の乗船・女学校における進歩的な教育、これらが北川栄にとって「限りなく楽しい思い出」となった。⁹

（二）青春

一九一〇年代も後半に入ると、キリスト教に対照的な二つの傾向が現れる。一つは人間の内面性を凝視して、そこに潜む様々な課題をキリスト教によって解決しようとした立場である。キリスト教と自我の問題に真剣に取り組んだ高倉徳太郎（一八五五—一九三四）¹⁰は、この立場を代表する。他方、地域社会に生じていた多くの課題を、キリスト教によって取り組んだ社会的活動も盛んになる。当時、同志社で教え学内の社会的活動の中心にいた中島重

(一八八八—一九四六)は、社会的基督教を提唱しキリスト教による社会問題の克服を試みていた。¹⁾

一九一九(大正八)年四月に、松原武夫は名古屋市にあった第八高等学校に進学する。武夫十六歳の春である。彼が自宅を離れて生活をしたのは、この時が最初である。ところで、松原家は代々浄土真宗の家系であり、武夫も日常的に親鸞の教えを身近に聞いて育っている。しかし、一人の生活を始めた第八高等学校在学中に、彼が探求したのは哲学的真理であって、宗教でも浄土真宗の教えでもなかった。なお、この時期にキリスト教徒の友人石井重雄と出会っている。一九二二(大正十一)年四月に、十九歳の松原武夫は東京大学理学部に入学する。ところが、東大に入学した年に患った盲腸炎が手遅れとなる。東大病院で十二月に手術したが、術後に腹膜炎を患い、一進一退の状態が続いた。翌年三月末にようやく退院したのもつかの間で、この年の六月には化膿して再入院し、再び手術を受けることになった。このようにして、度々生死の境をさ迷うことになった時期に、かつての哲学的真理を探究した問いは、自己の救いを希求する宗教的な求めへと変化していた。復学した一九二四(大正十三)年秋に、八高時代の友人石井重雄の誘いを受けて、武夫は青山会館で開催された東京市内外学生大連合礼拝に参加する。講師は高倉徳太郎で、自我の悩みを克服して語られる福音的基督教は武夫の魂に響き、彼は深い感動を覚えた。そこで、翌週の日曜日にはぜひ高倉の説教を聞きたいと願い、戸山教会に向かった山手線で偶然にも高倉と出会う。声をかけた所、武夫は講壇の前の席に座らされ、高倉の説教に真向かいになって一心に聞くことになった。以来、毎日曜日に武夫は戸山教会の礼拝に出席した。また、週一回開かれる高倉によるロマ書講解にも、毎回参加した。高倉の福音的基督教は、二年間の病床生活で切実になっていた、松原武夫の実存的な求めに対する答えを提供していた。こうして、一九二六(大正十五)年六月の聖霊降臨日に武夫は洗礼を受けて、キリスト教の信仰を生きる人となっ

た。ここに自我を形成した松原武夫の青春がある。なお、武夫は病気のため二年間遅れて、一九二七（昭和二）年三月に東京大学理学部を卒業している。¹²

一九二四（大正一三）年四月に、同志社女学校専門学部英文科に入学するに先だって、北川栄は室町寮に入る。両親の元を離れた初めての生活は、寮の規則に従った規則正しいもので、栄はここで日常的にキリスト教と触れることになる。なお、三年間の学生生活の間に、室町寮から大沢寮・常盤寮へ移っている。¹³

また、一室に三、四人の上級生、下級生が配置されて、家庭的な共同生活が続けられた。このころの寄宿舎生活はキリスト教主義の学校の寄宿舎らしく、朝夕の感謝、食前の祈りは一同が欠かすことなく習慣づけられたのであった。六時の起床のベルで身支度をし、部屋はもちろん廊下の拭掃除などをすませ、「お静か」（静かに聖書をよみ、朝の祈りをする）の時間を厳粛に守り、七時に朝食になる。……

日曜日は朝、当時は和服であったので、必ず袴袴の半衿をつけ直し、まず清潔な装いで教会に出席する用意をした。この聖日には半衿のつけ直し以外の他の目的のためには学業であつても針仕事は絶対に許されず、聖書、修身の勉強や讚美歌を歌つたり、手紙を書く以外は厳禁され聖日としての一日を過すのであつた。¹⁴……

同志社における生活も軌道に乗っていた一九二六（大正一五）年に、母ゆうが大病を患い、栄は十日間ほど看病のため帰省した。その時の経験から、彼女は聖書の言葉（マタイ福音書九章九―一三節）を素直に受け入れるようになる。このようにして、「神の確かな存在と人間の弱さ、愚かさ、醜さに眼を開かれた」ので、「十九歳の初冬、

大正十五年十二月六日新島襄と創立の苦楽を共にされたドクターラーネットから五十人の友と一緒に受洗し、死に至るまで主に忠誠を誓った」のである。なお、洗礼を受けた場所は同志社のチャペルである。受洗してからはキリスト教活動にも積極的に参加し、「賀川豊彦氏につれられて、卒業間際、神学部やYWの有志等と四貫島や葺合の貧民窟、長島の癩療養所の見学等で人間について社会について考えさせられた」のであった。北川栄の青春は、寮における友人との共同生活と専門部英文科における研究を通して、キリスト教による自我を形成した日々であった。彼女は一九二八（昭和三）年三月に、同志社女学校専門学部を卒業する。二十歳の春であった。¹⁵⁾

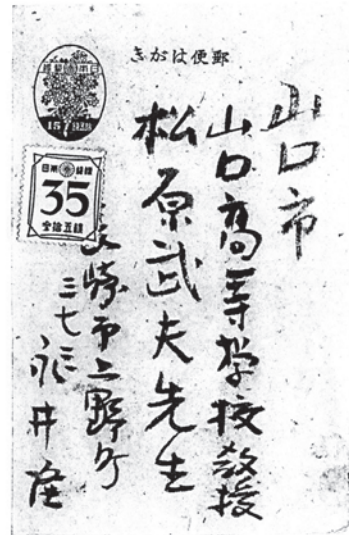
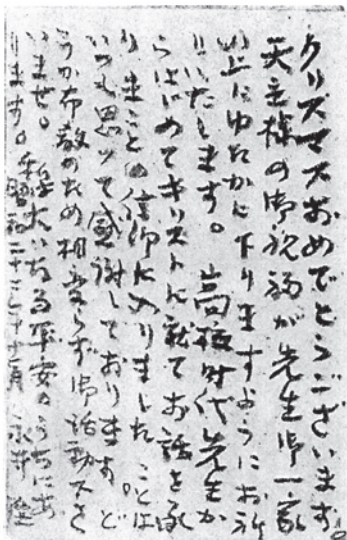
第二節 家族を守る

(一) 結婚

松原武夫は、田丸卓郎教授の推薦により一九二七（昭和二）年四月に、松江高等学校（島根大学の前身）の物理学担当教員として赴任した。東を中海、西を宍道湖、北を日本海に面する松江市は、城下町として発展した島根県の県庁所在地である。松江高校は、全国で一七番目の旧制高校として、一九二〇（大正九）年よりキャンパスの整備を始め、一九二一（大正十）年度より開校された。「談論風発を日々の生活の旨とした自由な校風」（藤田田）を特色とする高校は、武夫の赴任時は開学の当初期にあたった。松江へ赴くにあたって、高倉徳太郎から武夫は、「松江の開拓伝道に一役買ってもらいたい」と依頼された。そこで、元救世軍士官の薬剤師木村定晴と妻で助産婦の木村愛の協力を得て、松江市北堀町の下宿で日曜日夜に集会を始めた。近所の人たちや松江高校の学生等十数名の参加者があり、その一人には「長崎の鐘」で有名になる永井隆がいた。当時、高等学校三年生の永井隆は松原の集会

に参加して、初めてキリスト教に出会っている。武夫の下宿が手狭になったので、近くの空き家を借りて集会場所とし、隔週に鳥取教会の上河原雄吉牧師の応援を得た。それ以外の日曜日は、武夫が「証し」をした。一九二七年の冬休みに入ると、戸山教会での親友小塩力が応援に駆け付けてくれた。彼ら二人は冬休みの間、家庭集会の参加者を訪問した。一九二八（昭和三）年四月に、小塩は初代伝道師として松江に赴任した¹⁶。

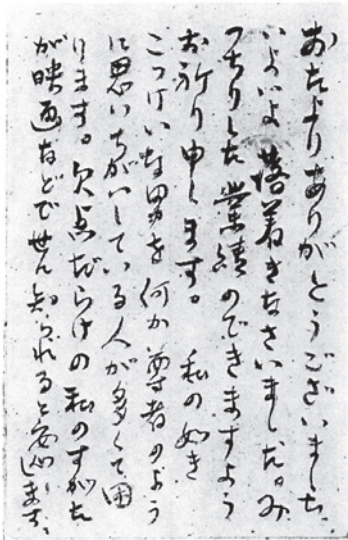
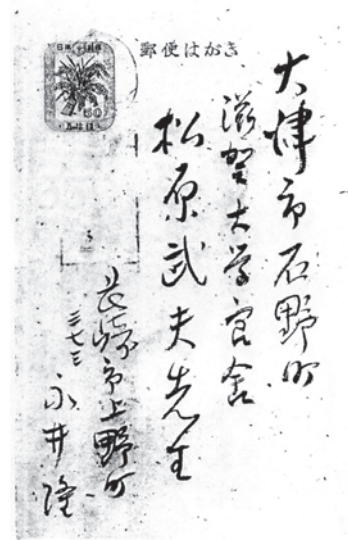
北川栄は、一九二八（昭和三）年四月に滋賀県立彦根高等女学校（滋賀県立彦根西高等学校の前身）に英語担当教員として赴任した。琵琶湖東岸で交通の要所に位置する彦根は城下町として成立した。一八八六（明治一九）年に設立された淡海高等女学校を前身とする彦根高等女学校は、栄の赴任時にはすでに五十年近い伝統を持っていた。同志社女学校専門部に在学した三年間では寮生活を送った栄は、彦根女学校には自宅から通勤したと推測される。彦根は近江八幡から東海道線の汽車を利



永井隆博士より松原武夫宛ての葉書一
昭和二十二年十二月の日付がある。永井隆記念館、所蔵¹⁷

用すれば約四十分の通勤圏であったからである。そのため、彦根女学校で教えた一年間は彼女が両親と過ごす最後の時となった¹⁸⁾。

近江八幡で教えていた松原廣吉と妻松原ちよ、同じく近江八幡で教育者であった北川辰次郎と妻北川ゆうの取り計らいで、松原武夫と北川栄は見合い結婚をする。結婚式は、一九二九（昭和四）年三月二十日に高倉徳太郎の司式により、同志社の神学館（現在のクラーク記念館）で挙行された。高倉が結婚式で読んだ聖書の言葉は、「ローマ人への手紙第十二章」であり、彼らは「毎年記念日には必ず二人で拝読し、信仰を初心にかえし、感謝の祈りを捧げている」。また、高倉がお祝いに贈った聖書の扉に記されていた言葉「汝らはキリストのためにただだ彼を信じる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり」（ピリピ人への手紙第一章二九節）は、武夫と栄を深くとらえた。¹⁹⁾



永井隆博士より松原武夫宛ての葉書二
昭和二十五年四月頃と思われる。永井隆記念館、所蔵

(二) 家族

松原武夫と栄が結婚した一九二九（昭和四）年十月に、アメリカ合衆国の株価暴落に端を発する世界的規模の大恐慌が起こる。そのため、世界各地で社会の不安定化が進行し、その克服に向けた取り組みが行われた。日本ではすでに、数年前から思想の統制が行われていた。すなわち、一九二五（大正十五）年四月に治安維持法を公布し、一九二八（昭和三）年三月には共産党員に対する全国的検挙を行った。そして、一九三一（昭和六）年九月に、満州事変が勃発する。十五年戦争という、長く続いた戦争の遂行によって解決をもくろんだ時代に、日本は突入していった。

松原武夫・栄夫妻の新居は、「奥谷町の一角、春日山の麓にある古びた木造二階建の借家であった」²⁰。武夫は自宅から川津村大字萱田（現在の松江市川津町）にある松江高等学校に通勤し、「理路整然とした」講義を行った。夜には、自宅で学生有志を集めてドイツ語小冊子の勉強会を開いている。²¹日曜日には、夫婦そろって松江市北堀にある教会に通った。武夫は教会の書記と会計を担当し、栄は小塩れい夫人と日曜学校を受け持った。一九三〇（昭和五）年二月に、松原家に長男茂雄が誕生し、家族は三人になった。この年の三月に、小塩力・れい夫妻は佐世保教会に転任したので、後任に内藤伝道師を迎えた。松原家では、一九三一（昭和二）年二月に次男郁雄が誕生し、子供は二人になった。内藤伝道師は、在任僅か一年で転任することになり、教会は四竈一郎牧師を迎えた。四竈牧師は会堂と牧師館の新築を目指し、一九三四（昭和九）年の復活節に献堂式を挙行了た。この年、一九三四年十一月に松原家では長女景子が誕生し、子供は三人になった。一九三六（昭和十一）年八月に、松原家では次女冷子が誕生し、子供は四人になった。²²

松原武夫の松江高等学校の在職は、一九二七（昭和二）年四月の着任以来、一九三九（垂昭和十四）年三月で十二年になったが、この時彼は転任する。戦争遂行に必要な技術者養成のため創立された、茨城県日立市にある多賀高等工業学校の物理学教授としてである。ところが、一九三九年四月に松原家には三女靖子が誕生する。そのため、四月に武夫が単身赴任し、栄と子供五人は八月になって日立市に転居した。日立市では、合瀬町にあった日立製作所の社宅に住んだ。日曜日には日立教会に通ったが、空襲後は木下順治牧師が自宅で開いていた礼拝へ、家族七人で一時間余りかけて通っている。一九四二（昭和十七）年四月に、三男広志が誕生する。松原家は、子供が六人いる八人家族の家庭となった。⁽²³⁾

(三) 戦禍の下で

松原家が日立市に転居した一九三九（昭和十四）年九月に、ヨーロッパではイギリスとフランスがドイツに宣戦を布告し、第二次世界大戦が始まった。日本は、一九四〇（昭和十五）年九月に日独伊三国軍事同盟に調印し、立場を明確にした。そして、一九四一（昭和十六）年十二月八日に、日本軍はハワイ真珠湾にアメリカ海軍を攻撃し、太平洋戦争が始まった。当初は戦線を拡大した日本軍も、一九四二（昭和十七）年六月のミッドウェイ海戦で大敗し、以後各地で敗退を余儀なくされていった。ヨーロッパ戦線でも、一九四三（昭和十八）年一月にドイツがロシアのサンクトペテルブルクで大敗し、同年九月にはイタリアが降伏した。一九四五（昭和二十）年に入ると、三月十日の東京大空襲など日本の各地は、アメリカ軍機による空襲を受けるようになった。四月に始まった沖繩戦では、六月に守備隊が壊滅した。原子爆弾の投下により八月六日に広島、八月九日に長崎で、多くの人々が犠牲になった。

おびただししい犠牲者を出し、ついに日本は一九四五年八月十五日に無条件全面降伏をした。しかし、その後も戦後の混乱が続き、民衆は厳しい生活を強いられた。

多賀高等工業学校の教員であった松原武夫も、職務として戦時体制への協力を求められている。戦局が厳しさを増していた一九四四（昭和一九）年七月には、五百名の学生で組織された学生勤労報国隊の引率者六名中の一名に選ばれて、樺太で一か月余り勤労奉仕をした。一九四五（昭和二十）年に入ると、多賀高等工業学校に学生戦闘報国隊を編成して二年生の大隊長になり、アメリカカ軍上陸に備えた。⁽²⁴⁾

その一方で、家族は戦禍の下にあって、文字通り生き死にの境をさまよう日々を過ごしていた。

忘れもしない（六月十日）には、真昼に日立工場は大空襲に曝された。遠くマリアナ群島からB29一二〇機が銀翼を連ねてやって来た。猛爆を受けて工場は殆ど全滅にひんし、職場を死守せよとの命令で多くの人々が犠牲となった。……越えて（七月十七日）雨のそぼ降る夜十一時四五分頃、いつものように警戒警報が鳴ってB29一機が上空を旋回したと思う間もなく、日立市は艦砲射撃の雨に曝された。……私は飛び起きて身を固め寮に駆け付け寮生の退避を指揮した。折しも寮門と寮事務所の間の広い庭に巡洋艦の砲弾が落ちて炸裂した。その破片の傘の中にいた学生たちの中、十二名即死、重傷後に死亡二名、重軽傷者四三名の犠牲者。忽ち阿鼻叫喚の巷と化した。……

寸暇を得て官舎に居るわが家族は如何にと帰って見れば、中学四年の長男から三歳の末子まで計六人の子供と妻は共同防空壕で無事で安心した。しかしわが官舎は駆逐艦の砲弾のあおりで五割大破、家財と図書は六割大破

して住める状態ではない。一方校長官舎は付近の田圃に落ちた砲弾が炸裂して倒壊し、玄關の近くで親子四人が下敷となって亡くなられたとの報告。私は校長一家の遺骸を引き出す作業の指揮者となり、屈強な学生たちと共に遺骸を引き出して、学校の木工工場で棺を作り、近くの僧侶を呼んで荼毘に付した。⁽²⁵⁾

松原栄は過酷な日々を思い起こし、記している。

慣れない関東で戦禍に巻き込まれ、毎日のようにB29の波状攻撃、艦砲射撃の直撃、焼夷弾、と戦場さながらの中でよくも親子八人が守られて無事であったと物は失っても命の助かった事を神に感謝した。⁽²⁶⁾

松原郁雄は家族を支えた栄の様子を記している。

日立へ来てからは、氣候風土のせいか、あるいは戦争のため段々と食料も乏しく栄養不足気味になって来たせいかは知らないが、兎に角、子供等は次から次へとよく病気をした。その中であって唯一人健康自慢であった私も、中学二年生の秋に、軍事教練や勤労作業での無理がたたったのか、肺門浸潤という病気になってしまい、母に心痛をかけたし、父も二度に亘る大病で入院生活を送ったりしたが、母はと云えば、ほとんど病氣らしい病氣もせず、一人で家族全体を支えて奮闘していたと云っても過言ではない。しかし、今にして思えば、母は少々加減が悪くても寝込まずに我慢をして家族のために立ち働いていたように思えてならない。⁽²⁷⁾

なお、艦砲射撃を受けた後、子供四人（景子、冷子、靖子、広志）は、父の郷里である滋賀県神崎郡小幡へ疎開し、終戦を迎えた。

（四）家族を守る

松原武夫は、一九四六（昭和二一）年四月に山口高等学校に転任した。戦災に遭い廃墟と化した日立市では、子供たち—この年茂雄は十六歳、郁雄は十五歳、景子は十二歳、冷子は十歳、靖子は七歳、広志は四歳であった—、とりわけ教育上大切な時期を迎えていた長男と次男に、適切な環境を与える事はできなかった。それに山口市に近い岩国には武夫の両親が、松原俊夫（武夫の兄）を頼って余生を過ごしていた。十一月に入って山口市に転居した家族が生活したのは、山口教会附属の明星幼稚園の二階三部屋であった。²⁸

武夫は、借家の明星幼稚園から山口高校に通勤した。当時は山口大学へと改組した時期で、それだけでも学内行政は多忙を極めたが、「食料不足のため学期末試験の延期を要求するストライキ」「教育法改悪反対のためのストライキ」などへの対応に、学生部長として武夫は矢面に立たされ疲れ切っていた。栄は家族八人の生活を支えるため、とりわけ厳しい食料事情の下で家族の食事を確保するために、日々苦心惨憺する生活を送っていた。そのような中で、武夫の両親松原廣吉と松原ちよ、そして栄の母北川ゆうが相ついで病床に伏し、亡くなっていった。「貧しさの為生活に追われお金もお米もなくて、家族を残して看病にもお葬式にも帰ることが出来ず」、栄は台所で何度となく涙する日々を過ごした。山口では子供たちも、親の窮状を察して少しでも手伝うため懸命に働いた。²⁹

食糧事情はまことに厳しく、ふかした馬鈴薯やすいとん、米のほとんど入っていない雑炊などが常食であった。育ち盛りの子供六人に食べさせるため、母はどんなに苦労したことであろうか。兄や私は親を助けるため、山口高校の運動場の片隅を耕して南瓜、トマト、キャベツなどを作り、また、高校の先生方と共同で家から六籽も離れた大内村の農家で畑地を借りてさつまいもや大豆を作ったり、高校の裏山で木を伐採してそれを木炭にしてもらい、分配を受けるなど必死に働いたものである。³⁰⁾

このように過ごす日々の中で、武夫と栄は「子供達の寝静まった夜、夫と二人聖書を読み、祈って慰め」あい、家族を守り抜くのであった。長男と次男は、「役員の楠川孝姉の御好意で長男次男は部屋を貸していただき高校三年間の勉学に、食糧づくりに、青年会活動にはげみ」、高校生活を過ごすことができた。松原冷子が生涯忘れることのできないクリスマスプレゼントを手にしたのも、山口時代であった。³¹⁾

第三節 安住の地、大津

(一) 子供たちの旅立ち

松原武夫の滋賀大学学芸学部（現在の教育学部）赴任に伴い、家族は一九五〇（昭和二五）年三月三十一日に国鉄大津駅前にある官舎に転居した。この年、武夫は四八歳、栄は四三歳、茂雄は二十歳、郁雄は十九歳、景子は十六歳、冷子は十四歳、靖子は十一歳、広志は八歳であった。すでに大学生であった茂雄と郁雄は下宿しているので、大津で日常的には六人の家族生活であった。³²⁾

琵琶湖南岸に沿って広がる大津市は、歴史的経緯からいくつかの際立った表情を持つ町によって構成されている。中心にある大津は江戸期には天領で、敦賀・小浜経由で京都へ物資を運ぶ港として、また東海道の宿場町として栄えた。大津の旧商店街から東へ約三キロメートル行った膳所は城下町で、それを偲ばせる地名が残り、地域には教育機関が充実している。大津から琵琶湖の西岸を約五キロメートル北に行くと、坂本がある。比叡山延暦寺の門前町として栄えたこの町は、現在もその景観を残して、独特の雰囲気を漂わせている。なお、当初大津駅前の官舎に住んだ松原家は、一九五九（昭和三四）年には膳所地区にある中の庄に、一九六八（昭和四三）年には大津と坂本の間地点に位置する滋賀里に転居している。

ところで、一九五〇年六〇年代は戦後の民主主義を背景に、日本が急速に経済成長を遂げた時期である。一九五〇年代には、車・カメラ・テレビ・クーラーが三Kと呼ばれて大衆化した。松原家でも、一九五五（昭和三〇）年前後に洗濯機を入れた後に、掃除機・冷蔵庫・テレビを順々に購入した。³³

武夫は、一九六八（昭和四三）年に滋賀大学教育学部を定年退官する。大津に住んで十八年目の春である。この間に大津から中の庄、次いで滋賀里へと二度にわたる転居を始め、松原家にも様々な変化があった。しかし、何よりも大きかったのは、子供たちが結婚して旅立ち、それぞれに独立した家庭を築いていた事である。一九六八年三月に新築した滋賀里の家に移った時、武夫・栄と生活を共にした家族は広志だけであった。

しかし、旅立ちの時も旅立ってから、子供たちとその家族は、松原武夫・栄夫妻にとってかけがえのない存在であり続けた。

松原茂雄は、横浜の会社へ転職するために国鉄大津駅から寝台列車で関東へ向かった時に、見送ってくれた母松原栄の姿を鮮明に記憶している。

母は健康を気にしてくれ、細々と石鹼まで入れた荷造りをしてくれたことを思い出す。当時はまだ新幹線もなく国鉄大津駅から寝台列車であった。大津駅前の官舎から、母が一人、プラットフォームまで見送りに来てくれた。暗い駅頭、電灯の明かりの中、窓越しに「元気でね！」と手を振り続けた母の姿を思い出し、胸が熱くなる。³⁴

安藤靖子は、親元を離れてなお何かと心にかけてくれた両親の姿を、具体的な光景と共に覚えている。

学生時代も嫁いでも、親元を離れての生活故、何かと心にかけて祈ってくれた両親でした。新幹線開通以前で、東京都間が十時間もかかった学生時代、寮で心淋しい想いをしていた折々に、上京しては励ましてくれた父の姿が、新宿で二人でつついた牛鍋の湯気の向こうに浮かんで来ます。³⁵

松原栄は、旅立った後の子供たちの家族を襲った病が、彼女にとって「深い痛手」となった事実を記している。

さて私達の息子、娘等はみな祝福され、主のみ前で結婚式を挙げそれぞれに巣立ちましたが、間もなく生後一ヶ月の次男の娘、初孫が、敗血症との報せに、福井へ飛んで行き死ぬ思いで日夜祈りと看病に明け暮れし危機一

髪の所で命をとりめホツとしどんなに神様に感謝しました事か。けれど続いて長男の家庭で四歳の健治と八ヶ月の由里を遺して、母の美智子は結婚生活七年でガンに倒れ召されてしまいました。そして代れるものなら代りたいと祈ることも忘れた程深い痛手をうけました。生後八ヶ月の赤ん坊由里を育てる為にひきとり大津へつれて帰りました。そしてここで学生時代から三十年つづいた教会学校の御奉仕も終わりました。⁽³⁶⁾

(二) 研究者・教育者としての松原武夫

松原武夫は、一九二七（昭和二）年四月に旧制松江高等学校に赴任して以来、研究者・教育者としての生涯を送った。一九五〇（昭和二五）年四月に、滋賀大学学芸学部（現在の教育学部）に赴任して一九六八（昭和四三）年三月に定年退官した⁽³⁷⁾後も、同年四月に聖徳学園女子短期大学教授を、一九七〇（昭和四五）年四月から一九八四年（昭和五九）年三月まで、滋賀女子短期大学初代学長を務めた。⁽³⁸⁾そこで、研究者・教育者としての武夫の姿を、彼の論文等を概観することによって見ておきたい。

松原武夫は東京大学で専攻した物理学の研究を続け教授し、科学に関する論文が三本残されている。

「自然科学教育と科学史」（『滋賀大学研究論集 第二部 自然科学』第二号、一九五三年、八七―九五頁）

「自然科学の成立と経験論」（『滋賀大学学芸部紀要 自然科学』第三号、一九五四年、七七―八二頁）

「Hypotheses non fingo」に就て（創刊十周年記念号）（『滋賀大学学芸部紀要 自然科学』第十号、一九六〇年、

ここでは、「自然科学の成立と経験論」を概観する。この論文は「〇、序言」でまず、物理学と経験論の関わり
にふれ、論文の意図と範囲を明らかにする。

物理学は優れて経験的な学問である。而して夫は、社会的経済的基盤の上に立って、特に技術と哲学とに密接
な交渉を持ちつつ発展して来たのであるが、物理学の発展に伴い、更に広く科学一般の発展に伴い、経験論の内
容も発展せざるを得ない。……物理学の発展史を中心として、経験論の問題に論及して行き度いと思う。本稿は
その第一部として、古典物理学特にニウトン力学との関連に於て近世経験論について考察する。⁽³⁰⁾

「一、実験的研究方法の成立と発展」では、古代ギリシャにおける科学精神と、それを克服していく近代科学に
おける経験と実験を展開している。

古代ギリシャ人は、疑科学時代を脱却して科学精神を確立した。それは単に実用のための断片的知識の集積で
はなく、凡ゆる自然現象を統一的原理によって論証的合理的に解釈せんとする精神である。……

近代科学は実在に関する凡ての問題を経験と実験により解決する。この著しい態度は決して自明のことではな
い。夫は人類歴史に於ける最近の収穫である。……

このような新しい経験的方法の勃興は、当時の社会的変革と関連している。即ち都市が次第に勃興して、修道
院や城はその社会的重要性が失われ、新しい社会的階級たる市民が歴史の舞台に登場し、又貨幣と利潤が市民生

活を支配し始めたことである。……このようにして、権威主義者や三談論法の論者は、経験により圧倒されるに至り、経験的精神の持主が優位を占めるに至ったのである。

……かくして合理的訓練と手仕事とが一体化せられ、ここに実験科学が発祥するに至ったのである。これは一六〇〇年前後の出来事であり、ガリレオ、F・ベーコン、W・ギルバート等に負うところが多く、人類歴史に於ける最も重要な事件の一つである。

……併し注意すべきことは、その実験の方法は絶えず理論的考察数学的演繹法によって裏付けられていることである。⁽⁴⁰⁾

「二、Newton 力学の確立」は、ガリレオやホイヘンスを超えて、力学的段階に到達したニュートンと彼の方法論を対象としている。

ガリレオの段階は未だ運動学的段階を脱し切って居らず、更に発展して力学的段階に到達したのはニュートンである。……ガリレオ、ホイヘンスの制約を脱して、一般的に凡ゆる運動現象に対して―夫は地上の物体たると天上の物体たるとを問わず―普遍妥当的な力学の法則は、ニュートンを俟って始めて到達されたのである。彼はガリレオもホイヘンスもなし得なかつた重量と質料の区別をし、力と質料と加速度の間に普遍的法則を発見したのである。……

このような実験的方法は、中世や古代の自然に対する目的論的乃至アニミズム的な見地を排して、客観に即し

て自然を自然の立場から認識せんとする方法である。実験は単なる観察や観測ではない。実験に於て実験者は人工的手段—実験装置—を用いて積極的に主体的に自然に問いかける。⁽⁴⁾

「三、機械的自然観と機械的決定論」は、ニュートン力学が生み出した機械的自然観に前提されている形而上学を巡って論じている。

かくして、近世物理学の目標は、アニミズムと目的論からの脱却、プランクの所謂 Anthropomorphism からの脱却にあり、自然現象に関する経験の量的規定と数学的形成に在る。かくして自然は主観性を全然否定された純粹に外的な存在として、単に量的な物体界となる。自然は単に物体の集合であり、自然の事件は凡て物体の運動に過ぎない。従って自然の法則は物体の運動の法則である。……

かくて、ニュートン力学の普遍妥当性は、純物理上乃至天文学上の力学的縮問題のこの法則による解決によって検証せられ、更に機械技術的問題に解決を与えると云う実証により、愈々高揚せられるに至った。かくして、機械的自然観（機械論）が生まれた。……

処で、この決定論の思想には経験的要素と形而上学的乃至神学的要素のあることを注意しなければならない。……ここに新しい問題が起こる。必然性は実証されない。夫は経験の範囲を超える。殊にその必然性が人格神の命令であるとか、非人格的自然の秩序であるとか解釈される場合には、神学的乃至形而上学的なものが加わって来る。

……併し、機械的自然観が量的機械的な外的世界を實在とし、質的精神的内的世界を幻想として區別することにより、知識の分析と哲学に約二世紀以上に互り概念の混乱を来したことはその悪い影響であつた。^(註)

「四、機械的自然観と近世経験論」は、機械的自然観との関連において、近世の経験論を論じている。

一七世紀はニュートン物理学確立の世紀であつた。彼の著（プリンキピア）の発刊されたのは、一六八七年である。又彼の（光学）は一七〇四年に出版されている。一八世紀はニュートン物理学の發展と完成の世紀である。此間即ち一七世紀一八世紀は哲学界では、初め合理論と経験論が対立し、之が遂にカントの批判哲学により止揚された時代である。今、機械的自然観との関連に於て近世の経験論を考察する。……

このイギリスの経験論は、内観的心理学の立場をとり、主観の側を追及して、主観主義に陥り、主観—客観の形而上学的仮象問題（Pseudo-Problem）に陥つている。……

何故イギリスの経験論は、内観的心理学には入り、主観—客観の形而上学に陥つたのであろうか。彼等経験論者が、当時急速な發展をとげつつあつた古典力学とその機械的自然観を取入れて、徹底的な機械論者であり、従つて、外界と内界、客観と主観を対立的に考えたことにその根源を有する。……

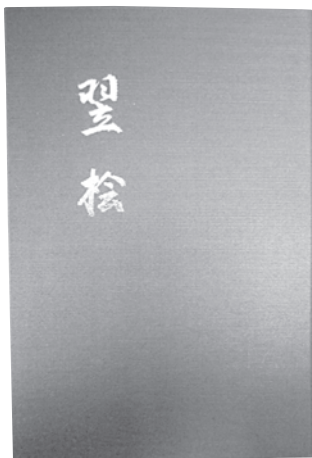
之に加うるに、宗教的伝統の影響により、多かれ少かれ、この二元論が靈魂と物質の対比と同一視されたと云うことも言える。このようにして、経験の分析は、ロックに至つて、内観の心理学へと転じ、心理の研究となり、経験は實在する外界の心理的模写となつた。……

扱、哲学史上最も重要な業績の一つは、ヒュームによる因果概念の分析である。彼によれば、原因と結果は論理的必然性により結付けられているのではなく、過去の度重なる経験の、連想による信念に過ぎないのであり、ア・ポステリオリのものである。……併しヒュームの言う如く、因果の概念が単に経験による信念に過ぎないならば、自然科学の法則も単なる信念に過ぎないものとなり、普遍妥当な必然的法則としての科学の法則の可能性を基礎づけることは出来ない。

……故にヒュームの残した問題の解決は、経験の現実に立脚して而も必然性をも生かすものでなければならぬ。換言すれば、経験論と唯理論の止揚でなければならず、ここにカントが出現して、批判哲学を提唱し、理性と経験、独断と懐疑の止揚を達成せんとしたのである。⁴³

「近代科学の成立と経験論」は、武夫の卓越した研究成果の一つであろう。この論文は古代ギリシャ以来近代に至る物理学研究を、それぞれの時代の精神性あるいは哲学と関連付けて論じている。したがって、単なる物理学史でも哲学史でもなく、両者の的確な理解に基づいた総合的研究である。武夫の長年にわたる研究活動によって、生み出された研究成果と言えよう。

『翌松』の「前篇 本学の目指すところ」には、滋賀女子短期大学学長として学生に向けて記したメッセージが、十七本掲載さ



松原武夫『翌松』
1984（昭和59）年

れている⁽⁴⁴⁾。その中から、「創立第一期生を迎えて」（一九七〇年四月）と「学報創刊のことば」（一九七七年十月）を選び、教育者としての姿を考える。

「創立第一期生を迎えて」は、大学には中心的に重要安「二本の柱」があることに注意を向けさせている。

凡そ大学を支える二本の柱は、人間性と学問性を護持し発展させることに在る。この両者の護持発展は相互媒介的であり、人間性を尊重するところに学問性は発展し、学問性を尊重するところに人間性は伸長するのである⁽⁴⁵⁾。そこでまず、人間性について言及する。

人間性とは何であろうか。人間の人間としての普遍的な本質であり、それは立場によりいろいろ考えられるが、私は哲学者カントと共に人格性と考えることがまず妥当であると思う。彼によれば、人格とはそれ自体が目的であり、他の何もの手段にもならないものである。戦争中、わが国は人的資源が豊富であるから負けないなどと大言壮語したものであったが、これこそ正に人間を物化し手段化したものであり、人格の疎外と忘却に外ならぬ⁽⁴⁶⁾。

次いで、学問性について記している。

学問性とは何であろうか。それは、単なる思い付きや想像で物事を処理するのではなく、確固たる研究方法をもつて物事を究め、物事の道理を明らかにすることである。大学は、教授されることを学習するだけでなく、その学習を媒介として研究方法を体得し、自ら問題を解決する能力を身につける場である。そして学問の道は厳しいものであることを心に銘じ、真理の前に謙虚に跪く精神をもつて学ぶべきである。⁽¹⁷⁾

「創刊のことば」では、滋賀女子短期大学で学ぶ学生たちに、大学の特色を三点具体的に挙げている。

本学の特色には三つあります。

第一は立地条件が素晴らしいことです。ここ竜が丘は、琵琶湖を一望のもとに風光明媚、緑深く空澄みわたる小高い丘であり、学園の環境として最も理想的な場所であります。しかも学舎は白亜の美しい建築であります。この教育環境を益々美化しましょう。

第二には本学の教学精神です。これを寸鉄で言えば「心技一如^{しんぎいちにょ}」の教育理想であり、これを現代的に表現すれば、「人間性と学問性の護持発展」を大学の二大支柱とする教育理想であります。そしてこの二つの柱は相互媒介的であります。優れた教授陣容による懇切な教育と学生の自発的な勉学により、また各種の課外活動と相俟つて、豊かな人間性を培い、広い視野に立って主体的に判断し自らの行動に責任をもつ確固たる人格を養い、他方学問に根ざした優れた技術を身につけることを眼目としています。

第三は、大学共同社会の創造を目指していることです。戦後の大学は単位と資格をとるための方便と化して利

益社会の様相を呈しました。これに反し、本学は正課と課外の活動を通して教師と学生間の人間的ふれあいを重んじ、学問的には厳しく人間的にはあたたかい大学共同社会を師弟協力して創造することを念願しています。⁴⁸⁾

学生に向けた二つのメッセージは、教育者松原武夫の姿勢をよく示している。「第一期生を迎えて」に記された「大学の二本柱は」、大学が教育機関であるための基本であり、それを学長として明確に示している。「創刊のことば」では、豊かな学生生活を送るための具体的なヒントを、三点提供している。これらは、人間を育てる教育者としての姿を、浮かび上がらせている。

(三) 共済会と松原栄

松原武夫・栄夫妻が、一九二九（昭和四）年三月二十日の結婚式以来、生涯にわたって抛り所としたのはキリスト教会であった。したがって、彼等は松江北堀教会（一九三九）・日立教会（一九三九―一九四六）・山口教会（一九四六―一九五〇）と、転居する度に地域に立つ教会に出席した。一九五〇（昭和二五）年四月に大津に移ってからは、日本キリスト教団大津教会に所属した。大津教会は、大津組合教会と大津同胞教会が合同して、一九四五（昭和二〇）年に成立した。会堂は、大津駅前にある（大津市末広町）旧大津同胞教会の建物を使用した。武夫と栄が転会した当時の牧師は、中村利雄（在任、一九三三―一九六八）で、それ以来原忠和（一九六八―一九七八）、堀川勝愛（一九七八―一九八二）、橋本滋男（代務、一九八二―八三、一九八八―八九）、石井英道（一九八三―一九八八）、稲垣壬午（一九八九―一九九六）が、担当している。

大津教会への出席を始めてから、栄が積極的に教会活動に参加していた様子を記している一文がある。

昭和二十五年松原さん御一家は山口から大津に引越していらつしゃいました。当時は戦後で家が不足していましたので、師範学校の寮にお住みになりました。大津教会がすぐ近くです。日曜日には皆さんで礼拝に出席なさいました。御夫婦はしばらくして役員におなりになり、奥様は教会学校の先生をなさいました。伝道に熱心な御夫妻は学生や友人を教会にお誘いになり、松江では教会をお作りになりました。私は奥様と親しくお交わりをし、教団の修養会に軽井沢や伊豆へ行きました。大津教会に矯風会をお作りになり、自ら支部長をなさり箱根や松山の全国大会に、一緒に出席しました。⁴⁹……

役員会・教会学校・婦人会・矯風会などに加わる中で、栄が心を砕いて担い続けた活動があった。共済会である。彼女は、大津教会に移った翌年一九五一（昭和二六）年から、共済会を担当した。

会員の皆様から寄せられる共済会費は、五年前から一人一カ月二十円、二人以上の御家族は、三十円と、それぞれ十円増していただくようになりました。数千円の会計が貴重な財源で、私は毎月祈りつつ集計を致します。



『大津教会史』
1969（昭和44）年

この大切なお仕事をお預かりしましたのは昭和二六年の四月、当時の会長の福井不二姉が和歌山へ転任された時からでございました。敗戦の痛手、混乱から漸く立ち上がろうと社会も教会も激しい胎動期にあった頃でございます。^②

共済会の活動について、栄は次のように記している。

御病気のお見舞い、結婚、出産のお祝、またお餞別等できるだけ心をこめて、少々の費用で喜んでいただける品を考えて持参致しました。

長いお煩いの方々をお見舞し、なおもその中で主のみこころを探り、共に御癒しと慰めを祈る時または全快して礼拝にお見えになって、手を取りあいつつお喜びする時、一つ幹に連なる恵みをしみじみ覚えます。

祈祷会の後、ルンペンストーブを囲んで部屋一ぱいに満ちている清々しい熱気に酔いながら、中村先生も薪を投げ入れて下さり、なおも話の花を咲かせ語りあつた青年の方々も、次々と結婚なさいました。そして二十年後の今日では教会の中堅としてゆるぎない信仰を持ち奉仕されています。この方々にお贈りした「ミレーの晩鐘」の額は、六十を越えました。アンゼラスの余韻の中で一日の労働をおえ、静かに祈っていただきたい願いが叶って、やがて出産のお祝にあがる私の眼にいちはやくお部屋にかかげられている額がとび込んでまいります時、思わず主のみ働きが感ぜられ、新しい生命を加えてひとしおこの若い御家庭がよいお証をされますよう祈って、育児日記やホームライブラリー等お贈りしてかえります。^③

中村利雄牧師をはじめ、共済会の祈りを込めた働きの中から、送られていった人たちも多い。

三十年の九月から、山本福丸、高橋信一、池田収二のお三人の御老人の為に敬老の礼拝をまもり、信仰を貫いて長い人生を生きておいでになりました方々に主の祝福を祈りました。昨年の敬老の日には十五人の七十歳以上の皆様の為に、原先生のお願いを快くききいれて中村先生が御病床の中を色紙を認めて下さいました。

「年輪に輝く一点　そわ主にある信、(恵)　利生」

最後に共済会の為に最大の贈物を下さって一カ月後先生は天に召されなさいました。

在りし日の先生の遺影を包んだ黄菊白菊の香の中に、共済会の捧げた花籠もさびしくみ霊の平安をお祈りした事でした。この世の業と信仰を全うし、永遠の生命をうけて、今は天に安らいでおいでの方々が次第にその数を増してゆきます。杉原姉、浜本長老等をはじめ中村先生との再会をどんなにかおよろこびになり、祝福されておいでの事でございます。

会員一人ひとりに、温かい目配りを怠ることなく必要が生じた際には、お祝いやお見舞いに駆けつける。共済会は、栄にふさわしい働きの場であった。

(四) 晩年

一九八四（昭和五九）年三月、松原武夫は滋賀女子短期大学を退任する。時に武夫八一歳、栄七七歳であった。この年、栄は公職を離れて自宅でくつろぐ武夫の日常の姿を、俳句に謳っている。

栄 退職の夫の横顔春炬燵⁵³

武夫の退任は、栄にとっても人生の大きな転機を意味した。彼女は夫が退任した翌年、自分の人生を「わが余生」と表現している。

栄 枯菊のかすかに匂いわが余生⁵⁴

公職から解放され、自由に思想し行動できた晩年を、武夫と栄はどのように生きたのであろうか。彼等に共通して認められる晩年の営みは、歩み帰り日々を、記録に残すことであった。そのために、時機を得た企画が大津教会による「私の信仰の歩み」の編纂である。『私の信仰の歩み 第一巻』（一九八五年九月二二日）には、松原武夫が寄稿している。『私の信仰の歩み 第二巻』（一九八六年九月十四日）には、松原栄が寄稿する。彼らが記した「私の信仰の歩み」には、相通じる一つの特徴がある。「人生の終わり」の自覚である。しかも、この「終わり」を、彼等は信仰の生涯の延長上に置いている。武夫と栄は、神に委ねた人生の終わりを俳句にも謳っている。

竹生 天命のまにまに幸や去年今年（一九八九年）

初春や天命のままにわが米寿⁽⁵⁵⁾（一九九〇年）

栄 初夢や湖かがやきて傘寿の帆（一九八七年）

小さきほど愛しきものよ赤のまま⁽⁵⁶⁾（一九八八年）

晩年の武夫が、強くこだわったのは、平和の追求である。一九八二（昭和五七）年に、長崎から大津教会に赴任した石井英道牧師は、「非核平和滋賀県巨言をめざす会」代表を務めていた。そこで、一九八四年に学長を退任すると、武夫は積極的にこの会に参加した。署名活動を進めて市議会に請願し、一九八七（昭和六二）年には採択を得ている⁽⁵⁷⁾。この年の五月二三日には「子々孫々に平和を」を脱稿して、『大津ロータリークラブ年報』（一九八七年度）に掲載されている⁽⁵⁸⁾。晩年の栄が強く主張を続けたのは、「しゃくなげ会」への入会であった。一九七四（昭和四九）年に滋賀医科大学が設立されると、解部用遺体の確保が重要になった。そこで、医学の研究と発展に寄与し、併せて人類の幸福を追求するために、献体組織「しゃくなげ会」が滋賀県に組織された。栄はこの趣旨に賛同したが、武夫は必ずしも同意しなかった。彼は、納得がいくまで「しゃくなげ会」事務所を訪ねて、話を聞いた。その間、栄は一貫して参加の意志を持ち続けた。ついに両者の意見が一致し、二人揃って「しゃくなげ会」に入会したのは、一九八七（昭和六二）年四月九日である⁽⁵⁹⁾。

栄は、一九九〇（平成二）年にリユーマチを患い治療を続けたが、心臓と腎臓も悪化して入退院を繰り返すことになる。当時の俳句には、彼女の心持が良く表現されている。栄を看病した武夫も、俳句を謳っている。

栄

落添へて季節にほえり病人食（一九九〇年）

花の日や加茂川べりを退院す（一九九〇年）

養生のためや今宵の冷奴（一九九〇年）

療養の部屋に木犀ほのかなり（一九九一年）

世ばなれの病室ひとりそぞろ寒（一九九一年）

療養の眼にはまぶしき石路の花⁽⁶⁰⁾（一九九一年）

竹生

春立つや別れし人の眼に涙（一九九〇年）

点滴の命しずかに花の夜（一九九〇年）

夾竹桃の白きを好み老ひしいま⁽⁶¹⁾（一九九〇年）

栄は、一九九一年（平成三年）八月十七日に召天した。八三歳十か月であった。武夫は、栄の後を追うようにして、一九九二年（平成四年）年七月十一日に召天する。八九歳十一か月であった。

注

- (1) 『翌松』は、松原武夫が学長を務めた滋賀女子短期大学で、折々に彼が語った教育方針を「前篇 本学の目指すところ」としてまとめ、収めている。
- (2) 松原武夫「私の信仰の歩み」は、『追想』（三十一―四三頁）に再録されている。本稿は、『追想』から引用している。
- (3) 「子々孫々に平和を」は、『天津教会五十年誌』（一九九七年、一三三―一四〇頁）に再録されている。

- (4) 松原栄「私の信仰の歩み」は、『追想』(四四―六四頁)及び『天津教会五十年誌』(二四一―二四九頁)に再録されている。本稿は、『追想』から引用した。
- (5) 松原武夫「前篇 本学の目指すところ」(『翠松』七―七四頁)
- 松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』六五―八五頁)
- (6) 松原栄さんは困ったような顔をして、「主人はどんな小さなことでもすぐに、病院、病院と大げさに言うんですよ」と言っておられた。幼少期に体が弱く、すぐにお医者様に見てもらっていた習慣があつて、後々にまで影響していたものと思われる。
- (7) 「父母を心に呼びて暮洗ふ 竹生」(『金扇』十七頁)の一句には、松原武夫が愛情をこめて育ててくれた父母を偲ぶ想いが満ちている。
- (8) 一九一〇年代に、東海道線を利用して近江八幡から膳所や彦根までの通勤と通学が、可能になっていた。汽車で近江八幡から膳所あるいは彦根間は、いずれも約四十分間であつたことをヴォーリスが記している。
W.M. Vories, *The Oni Brotherhood in Japan*, P.29.
- (9) 参照、松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』四五頁)
- (10) 高倉徳太郎のキリスト教による自我の問題との取り組みを扱った論文がある。
- 高倉徳太郎「キリスト教によりて改造される自我およびその特色」(『高倉徳太郎著作集1』八五―九七頁)
- (11) キリスト教による社会的課題との取り組みを論じた中島重の著書がある。
中島重『神と共同社会』新生堂、一九二九年
- (12) 松原武夫の東京大学時代における病床生活と魂の求め、そして高倉徳太郎との出会いについては左記を参照。
- 松原武夫「私の信仰の歩み」(『追想』三十一―三七頁)
- (13) 同志社女学校キャンパスの見取り図については、左記を参照。
「一、同志社今出川地域校舎配置図」(『同志社九十年小史』)
- (14) 『同志社百年史』通史編一 八二―八五―八八頁
- (15) 北川栄の同志社女学校専門部時代については、左記を参照。
松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』四五―四八頁)
- 「松原栄追悼の言葉」(『追想』二五八―二六五頁)

(16) 松原武夫の松江高等学校赴任当初の様子については、左記を参照。

松原武夫「私の信仰の歩み」〔追想〕三七―三九頁

なお、竹澤知代志が当時の松原のキリスト教活動について紹介している。

このキリスト教不毛の地に、一九二七年、松原武夫という東京帝大を出たばかりの青年が、旧制松江高校の教授として赴任し、下宿の八畳二間で集會が始まった。帝大と戸山教会で同窓、親友だった小塩力が、休みを利用しては応援し、東京神学社卒業と同時に、牧師に就任した。高倉徳太郎と彼の率いる基督教婦人伝道会社が、これを支えたと聞く。

一九三三年、法的には初代の牧師に当たる四竈一郎によって、日本基督教会・松江伝道教会設立、二年後には松原の捧げた土地に、会堂が建てられた。おそろく、最初の伝道開始から半世紀の後のことになる。

竹澤知代志「攻めの教会形成を目ざして」〔東京神学大学報〕一六九号、一九九二年五月、三頁

(17) 松原郁雄に二通の葉書の寄贈を求める永井隆記念館（鳥根県雲南市）の館長名原久雄の書面がある。ここに「永井博士の葉書」の価値が記されている。

永井博士の葉書の件は、馬庭将光様からご紹介をいただきましたがあれこれと手間取り、ご心配をいただくことになり大変申し訳ありませんでした。松原様所有の葉書は、ご親族様にとりましては、父君を思い出される大切な葉書だと思います。又、博士との親交を知る貴重な葉書だとも思います。

そうした大切な葉書だとは存じながら、誠にあつかましいお願いでございますが、是非当館へお譲り下さいますようお願い申し上げます。大切に保管・展示させていただきます、末永く永井博士顕彰と精神普及に役立てたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで、鳥根県雲南市立（永井博士生い立ちの町）永井隆記念館は、昭和四五年、博士の精神の顕彰並びに人々への浸透と有為な人材が未来永劫輩出するようお願い建設されました。館内には、博士の恩師、友人をはじめ全国各地の方々からご提供をいただいた書簡や写真・色紙、関係資料など、現在二八〇余点を展示公開しています。これらの遺作品・資料を通して博士の人柄に触れていただき、「平和を」の願い「如己愛人」の心で生きたいとの博士の思いを、広く平和学習の小中学生や全国からの来館者に伝えているところです。

二〇一一年十一月 永井隆記念館 館長 名原久雄

(18) 北川栄が、滋賀県立彦根高等学校で英語を教えていた様子を、彷彿とさせる文章がある。

松原茂雄「父母の思い出」〔追想〕九十頁

- (19) 彼らの結婚式については、左記を参照。
松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』四八頁)
- (20) 松江における新居については、左記を引用した。
松原郁夫「父母の思い出」(『追想』一〇一頁)
- (21) 松原武夫の松江高等学校における様子については、左記を参照した。
後藤憲一「松原先生を偲んで」(『追想』二四六―二五〇頁)
- (22) 松原家の松江における生活については、左記を参照した。
「松原武夫・栄略歴」(『追想』二一六頁)
松原武夫「私の信仰の歩み」(『追想』三九―四〇頁)
松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』四九―五一頁)
松原郁夫「父母の思い出」(『追想』一〇一―一〇三頁)
- (23) 松原家の日立市における生活については、左記を参照した。
「松原武夫・栄略歴」(『追想』二一六頁)
松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』五一―五三頁)
松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』六八頁)
松原茂雄「父母の思い出」(『追想』九十一―九二頁)
松原郁雄「父母の思い出」(『追想』一〇四―一〇六頁)
木村道也「松原武夫先生を偲ぶ」(『追想』二五三頁)
- (24) 参照、松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』七十一―七二頁)
- (25) 松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』七十一―七五頁)
- (26) 松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』五二頁)
- (27) 松原郁雄「父母の思い出」(『追想』一〇六―一〇七頁)
山口に転居した当時の様子については、左記を参照した。
- (28) 「松原武夫・栄略歴」(『追想』二一四頁)
松原茂雄「父母の思い出」(『追想』九二―九三頁)

- (29) 松原郁雄「父母の思い出」(『追想』一一一—一二三頁)
山口における生活については、左記を参照した。
- 松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』五三一—五六頁)
松原郁雄「父母の思い出」(『追想』一一三—一一五頁)
北垣景子「父母を天に送って」(『追想』一二四頁)
松原広志「父と母の思い出」(『追想』一七〇—一七二頁)
(30) 松原郁雄「父母の思い出」(『追想』一一三頁)
松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』五四—五六頁)
(31) 参照、松原広志「父と母の思い出」(『追想』一六四頁)
(32) 参照、松原広志「父と母の思い出」(『追想』一六四頁)
(33) 参照、松原広志「父と母の思い出」(『追想』一六四—一六六頁)
(34) 松原茂雄「父母の思い出」(『追想』九四—九五頁)
(35) 安藤靖子「父母の思い出」(『追想』一五五頁)
(36) 松原栄「私の信仰の歩み」(『追想』五七—五八頁)
(37) 滋賀大学は、滋賀師範学校と彦根高等商業高校を母体に、国立大学として一九四九(昭和二四)年に設置された。教育学部(大津キャンパス)と経済学部(彦根キャンパス)で構成されている。大津キャンパスは大津市平津にある。
- (38) 滋賀女子短期大学は、学校法人純美礼(すみれ)学園によって、一九七〇(昭和四五)年に設立された。当初は、服飾学科と幼児教育学科の二学科で発足した。現在は、滋賀短期大学と改称し、男女共学となっている。大津市の竜が丘にある。
- (39) 松原武夫「自然科学の成立と経験論」(『滋賀大学学芸学部紀要 自然科学』第三号、七七頁)
(40) 松原武夫、前掲書、七七—七九頁
(41) 松原武夫、前掲書、七九頁
(42) 松原武夫、前掲書、八〇—八一頁
(43) 松原武夫、前掲書、八一—八二頁
(44) 十七本のメッセージは、次の通りである。
松原武夫「創立第一期生を迎えて」(『翌松』九—十二頁)
松原武夫「学長のすすめの言」(『翌松』一三—十八頁)

- 松原武夫「学報 創刊のことば」〔『翌松』十九―二十二頁〕
- 松原武夫「新人生のみなさんへ」〔『翌松』二二―二四頁〕
- 松原武夫「高等教育における私立女子短期大学の使命」〔『翌松』二五―二七頁〕
- 松原武夫「一般教育と専門教育」〔『翌松』二八―三〇頁〕
- 松原武夫「質と量」〔『翌松』三一―三三頁〕
- 松原武夫「創立十周年を記念して」〔『翌松』三四―四〇頁〕
- 松原武夫「一九八〇年代の短大教育と本学」〔『翌松』四一―四四頁〕
- 松原武夫「新人生を迎えて」〔『翌松』四五―四七頁〕
- 松原武夫「第十七回全国身障者スポーツ大会と本学」〔『翌松』四八―五一頁〕
- 松原武夫「新人生を迎えて」〔『翌松』五二―五四頁〕
- 松原武夫「第二十箇年の展望」〔『翌松』五五―五七頁〕
- 松原武夫「日々新たに」〔『翌松』五八―六〇頁〕
- 松原武夫「本学の生きる道」〔『翌松』六一―六六頁〕
- 松原武夫「卒業を祝して」〔『翌松』六七―七〇頁〕
- 松原武夫「本学の発展を祈って」〔『翌松』七一―七四頁〕
- (45) 松原武夫「創立第一期生を迎えて」〔『翌松』九頁〕
- (46) 松原武夫、前掲書、九―十頁
- (47) 松原武夫、前掲書、十頁
- (48) 松原武夫「創刊のことば」〔『翌松』十九―二十頁〕
- (49) 浜本環「松原栄姉告別式の弔辞」〔『追想』二二―二三頁〕
- (50) 松原栄「共済会のこと」〔『大津教会史』一四二―一四三頁〕
- (51) 松原栄、前掲書、一四三頁
- (52) 松原栄、前掲書、一四四頁
- (53) 松原栄「生活句」〔『追想』十頁〕
- (54) 松原栄、前掲書、十頁

(55) 松原武夫「年賀状掲載句」(『追想』八頁)

(56) 松原栄「年賀状掲載句」(『追想』七頁)

松原栄「生活句」(『追想』十四頁)

(57) 参照、松下冷子「お父さん、お母さんの思い出」(『追想』一三六―一三七頁)

(58) 松原武夫「子々孫々に平和を」(『追想』六八―八五頁)は、彼自身の経験を中心に置き、近代日本の戦争と平和に関する歴史をまとめている。中でも重要なのは、太平洋戦争期における経験である。ところで、この記述において一方では戦争の悲惨な現実を語る(『追想』七二―七五頁)が、他方で戦時下における彼自身の果敢な行動について誇りを込めて語っている(『追想』七〇―七一頁、七二頁)したがって、「子々孫々に平和を残し度い」(『追想』八四―八五頁)は単なる意見ではなく、歴史的経験を止揚した主張と考えるべきであろう。

(59) 参照、松原郁雄「父母の献体と『しゃくなげ会』のこと」(『追想』一九四―二〇五頁)

(60) 松原栄「生活句」(『追想』二二―二九頁)

(61) 松原武夫「生活句」(『追想』二二―二四頁)

第三章 松原武夫・栄と近代日本を生きた人間像

はじめに ― 課題 ―

松原武夫・栄遺族一同による『追想』は、着想から二年半ほどの年月をかけて出版された。一九九一年(平成三)年八月十七日に栄が召天し、翌一九九二年(平成四)年七月十一日に「母の後を追うかのように父が亡くなり、その後始末のため兄弟姉妹六人が滋賀里の家に集まった一九九二年の暮れ、両親追悼の気持ちを活字にして残そうということで皆の意見が一致」した。それから一年半ほど後の一九九四年(平成六)年五月には、「全員の原稿がそろうめどがたち、追悼文集の構成案が」できる。さらに、「父母の俳句を……調べ、写真や絵画を選ぶなどの作業をほ

ほ終えたのは一九九四年暮れのこと」であった。このような経緯を経て、一九九五（平成七）年六月三十日に松原武夫・栄遺族一同『追想』は刊行された。作成にあたって、松下冷子は「表紙の布地や俳画の選定とレイアウト」を中心になって担当し、「お父さん、お母さんの思い出」（『追想』一三三―一四七頁）を寄稿している。^①

それから年月を重ね、二〇二二（平成二四）年には、松原武夫召天二十年・栄召天二十一年の年を迎えた。そこで、関係者は二

〇二二年七月三日（火）に、大津教会霊安塔前で「松原武夫召天二十年・栄召天二十一年記念会」を挙行した。また、「父母召天二十年、二十一年の記念会に合わせ子供六人が各々に過去に書き記したもの（主に戦争体験記）をまとめようと」相談した。そこで、松下冷子が「今回の企画の主旨に添うもの」としてまとめたのが、短歌と随想から構成された「小品集」である。

およそ二十年の年月を隔てて書かれた「小品集」には、両親の召天から間もない時にまとめられた「お父さん、お母さんの思い出」とは、際立った違いが感じられる。この違いはどこから来たのか。それは二十年という歳月の経過において、松下冷子の感性と霊性を介して両親の思い出が昇華され、それが彼女の自然観や人間観の中に融解されたためだと考えられる。また、彼女の感性や霊性は、長い日本人の心の歴史において育まれてきたので、松下一人のものではなく、広く日本人一般に共有されている資質だと思われる。したがって、松原武夫と松原栄の生涯



松原武夫・栄遺族一同
『追想』（1995年）

を、「近代日本を生きた人間像」の一事例として取り上げることができる。ところで、ここにもう一つの問題が生じる。確かに、近代という時代を生きた二人のイメージは抽象化を通して、「近代日本を生きた人間像」のモデルとなる。ところでその際、彼等の個性すなわち彼等の人格は抽象的な人間像の中に吸収されて、全く喪失されてしまうのか。それとも、そこにおいてもなお彼らが意志的主体として生きた真実は確保されるのか。確保されるとしたら、それはどのような形で保たれるのかという問題である。

「小品集」を、いくつかの側面から「お父さん、お母さんの思い出」と比較して、それが持つ特色を明らかにする作業を通して、これらの課題に取り組んでいきたい。

第一節 松下冷子「小品集」の特色

(一)「お父さん、お母さんの思い出」における武夫と栄

短歌と随筆から構成されている松下冷子「小品集」は、扱っている題材と表現法において特色を持っている。本稿は「第二章 松下冷子『小品集』解題」で、すでに個々の作品の分析を試みた。けれども、「小品集」そのものの分析からは、そこに内在する特色を必ずしも浮き彫りにはできていない。そのため、何らかの手法が、「小品集」の特色を際立たせるために必要となる。そこで、同じ著者による「お父さん、お母さんの思い出」（以下、「思い出」と略記する）を取り上げて検討し、さらに「小品集」との比較を通して、その特色を明らかにしたい。

まず、「思い出」の内容を段落による構成から分析する。次の通りである。

- 第一段落 父の思い出（六〇行）
- 第二段落 母の思い出（五七行）
- 第三段落 両親との思い出（一九行）
- 第四段落 夫婦の姿（六行）
- 第五段落 結びの言葉（二行）

このように見ると、行数からも「思い出」の主要な内容は、「第一段落 父の思い出」と「第二段落 母の思い出」にあることが分かる。松江旅行や須賀谷旅行を取り上げている第三段落や、クリスチャン夫婦の姿を記した第四段落は、主要部分に対する補足的な機能を果たしている。

そこで、第一段落と第二段落の内容を、さらに詳細に検討する。それぞれの構成は次の通りである。

「第一段落 父の思い出」の構成

- 一 父の最期（七行）
- 二 『金扇』を読む会での父（五行）
- 三 散歩する父（九行）
- 四 滋賀女子短期大学における父（十行）
- 五 苦楽を共にする父（七行）

- 六 平和を求め活動する父（十行）
- 七 お母さんに先立たれた父⁽²⁾（十二行）

「第二段落 母の思い出」の構成

- 一 母の最期（十二行）
- 二 配慮する母（十一行）
- 三 洋服を縫ってくれた母（七行）
- 四 本当にご苦労さまでした。（七行）
- 五 母の老後と趣味（六行）
- 六 母の味（六行）
- 七 見事な生き方⁽³⁾（八行）

「第一段落 父の思い出」と「第二段落 母の思い出」は、ほぼ同じ構造を示している。第一段落は、「一 父の最期」で始め、「七 お母さんに先立たれた父」において死に向かう父を描写して結んでいる。同様に第二段落も、「二 母の最期」で始め、死に向かう母を描いた「七 見事な生き方」で結んでいる。要するに、「第一段落 父の思い出」も「第二段落 母の思い出」も、初めと終わりには父と母の最期を置いている。これはおそらく、松下冷子の心の有りようを投影している。「お父さん、お母さんの思い出」を執筆した時、彼女の心には繰り返し

父と母の最期が思い起こされていた。彼等の最期を強烈に思い出しながら、それでも何とか彼女は原稿の執筆に向かったのである。したがって、読者は武夫と栄の最期から強い印象を受ける。次に、初めと終わりの間に囲まれた部分の内容である。ここでは、父と母の生き方をよく現わす具体的な出来事が記されている。父親である武夫の場合、「四 滋賀女子短期大学における父」、「五 苦楽を共にした父」、「六 平和を求め活動する父」など、社会における父の意志的な生き方を思い出している。母親の栄の場合、「一 配慮する母」、「三 洋服を縫ってくれた母」、「四 本당にご苦労さまでした」、「六 母の味」など、家族のために大変な苦労をしながら、松下もその大変さに共感しつつ、母は見事な生き方をしたとしている。

(二) 「お父さん、お母さんの思い出」と「小品集」

松下冷子「小品集」の特色を浮き彫りにするために、三点において「思い出」との比較検討を行いたい。構成・内容・表現方法の三点である。

まず構成の比較である。この作業については、「思い出」の全文と「小品集」前半の短歌の部を主に比較する。「表一」より、「思い出」の冒頭にある「第一段落 父の思い出」は明らかに、「小品集」の初めに置かれている「父の背」と対応している。同様に、「思い出」の「第二段落 母の思い出」は、「小品集」の「母のまなざし」に対応する。さらに「第五段落 結びの言葉」と対応する部分として、「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」を挙げることができる。このような分析結果から、「思い出」と「小品集」前半の短歌の部は、きわめて類似した構成を採っていることが分かる。そうだとすると、「小品集」の後半にある随筆については、どのように考えれば良いの

か。随筆は量的には大きいが、内容的には「父の背」、「母のまなざし」と「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」の間に置かれた部分に対応していて、それが拡大して、「小品集」の後半部分を占めたと解釈できる。このように考えると、「小品集」は二十年程前に書かれた「思い出」と、構造的には類似していると結論づけられる。

次に、内容に関する比較である。この検討で全文を取り上げることではできないので、「思い出」からは「第一段落 父の思い出」を、「小品集」からは「父の背」を取り上げて比較する。「第一段落 父の思い出」の「一 父の最期」と「七 お母さんに先立たれた父」に対応するのは、「父の背」の第三句と第四句である。これらにおいて、前者が父の最期の様子をありありと描き出しているのに対して、後者は大文字の送り火や星の瞬きと重ねて、在りし日の父の姿を心に描いている。「二 『金扇』を読む会での父」と「三 散歩する父」に対応するのは、第一句と第二句である。前者が、読む会や散歩する武夫の様子を生き生きと描いているのに対して、後者は萩の花との類比や大津祭におけるからくり人形の舞を用いて、父を思い出している。「四 滋賀女子短期大学における父」と

表一 「お父さん、お母さんの思い出」と「小品集」短歌の部の構成

「お父さん、お母さんの思い出」の構成	「小品集」の構成
第一段落 父の思い出	短歌「父の背」
第二段落 母の思い出	「母のまなざし」
第三段落 両親との思い出	「湖の季」
第四段落 夫婦の姿	「過ぎし日 今」
第五段落 結びの言葉	「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」随筆（六編）

「五 苦楽を共にする父」と対応するのは、「教育者松原武夫を謳う四句」である。前者では、松下が見た父を彼女にしか分からない細かな描写で記しているのに対して、後者は坂道・句碑と赤とんぼ・学園のどよめき・記念句碑の父の字等を取り上げて、父を偲んでいる。「六 平和を求め活動する父」に対応するのは、「平和を追求した父母を歌う二句」である。前者が、武夫の取り組んだ平和活動を具体的に取り上げているのに対して、後者は父の平和に向けた意志を、他の事柄と重ねて語っている。このように、散文で書かれた「第一段落 父の思い出」では、生き生きとよみがえってくる父の姿が、時々彼の振る舞いを細かく描写することによって描き出されている。ここでは父だけが中心におかれている。それに対して「父の背」では、大文字の送り火・萩の花びら・句碑と赤とんぼ等の情景の中に父を置き、懐かしい父を偲んでいる。そこにおいて父は、様々な情景のなかにいてそれらと共に思い出されている。

表二 「父の思い出」と「父の背」の内容^⑤

「第一段落 父の思い出」の内容	「父の背」の内容
<p>一 父の最期</p> <p>二 『金扇』を読む会での父</p> <p>三 散歩する父</p> <p>四 滋賀女子短期大学における父</p> <p>五 苦楽を共にする父</p> <p>六 平和を求め活動する父</p> <p>七 お母さんに先立たれた父</p>	<p>・ 第一句と第二句は、年老いてなお衰える事のない好奇心から、何事にも熱心に取り組んだ松原武夫を謳っている。</p> <p>・ 第三句と第四句は、地上にあった日の父母の存在を、天上の世界と重ねて謳う。その際に、送り火や星が両者の架け橋となっている。</p> <p>・ 教育者松原武夫を謳う第四句は、キャンパスの豊かな自然を色彩豊かに描きながら、句碑に刻まれた言葉「あすなるや 純美礼の園に 芽吹きつつ」に、思いを寄せている。</p> <p>・ 平和を追求した父母を歌う二句は、彼等の強い意志に貫かれていて、抒情を交えていたこれまでの八句とは、内容を異にしている。</p>

最後に、表現方法に関する比較である。この検討では、「思い出」から「第二段落 母の思い出」を、「小品集」からは「母のまなざし」を取り上げて考察する⁶。なお、表現方法の考察にあたっては、内容に共通するものを考察の対象として比較検討する。「一 母の最期」と「二 配慮する母」に対応するのは、「母のまなざし」の第一句と第二句である。前者は緊迫した最後の十日間余りを筆者の感情もあらわに描き、あるいは連れ立って買物に出かけた様子を思い出しながら記している。それに対して後者は、待ち合わせたホームに吹く風に母の香を懐かしみ、大文字の送り火の赤さに母の温もりを蘇らせている。「三 洋服を縫ってくれた母」「四 本当にご苦労さまでした」「七 見事な生き方」に対応するのは、第三句・第四句と第五句である。前者は、食糧さえまならなかった時代に服を縫ってくれた母、生活するのに不自由が多かった時に家族八人を養った母の苦労を具体的に描き、日常生活においてはいつものように他者を助けた母を、「見事な生き方」と評価している。後者は「弾痕の残った桐だんす」に母の生き方を思い、節の川に山口時代の母の苦労を偲び、抜歯した夜に年を重ねた母の想いを想起している。「五 母の老後と趣味」と「六 母の味」に対応するのは、第六句から第十句である。前者では母の表情を交えながら、老後の彼女の趣味と懐かしいおふくろの味を記している。後者は、紫鉄仙・ひまわり・鶏頭の花をじつと眺めながら、母のまなざし・母のおしゃれ・母の笑みなどをいとおしんでいる。このように前者は散文で、母の生き方と最期を具体的な振る舞いを交えながら、生き生きとした臨場感を伴わせて表現している。それに対して後者は短歌で、ホームに吹く風・大文字の送り火・桐だんすなどを登場させながら、感覚的で詩的で絵画的な世界の中に母の存在と生き方へのいとおしさを謳っている。

表三 「母の思い出」と「母のまなざし」の表現方法⁽⁷⁾

「第二段落 母の思い出」の表現方法	「母のまなざし」の表現方法
<p>一 母の最期</p> <p>二 配慮する母</p> <p>三 洋服を縫ってくれた母</p> <p>四 本当にご苦労さまでした。</p> <p>五 母の老後と趣味</p> <p>六 母の味</p> <p>七 見事な生き方</p>	<p>・第一句と第二句は、肩越しの風や大文字の送り火から、感覚的に蘇ってきた母の香や温もりを謳い、母というかけがえのない存在の特質を浮かびあがらせている。</p> <p>・第三句・第四句と第五句は、母の言葉や彼女が使い続けていた生活道具から、思想する生活者であった母の想いの深みを探っている。</p> <p>・第六句から第十句は、母の愛した花々、とりわけ紫の鉄仙に重ねて彼女を思い起こし、母の眼差しへのいとおしさを謳っている。</p>

(三) 変化させたものへの問い

「第三章 第一節 松下冷子『小品集』」の特色(一)(二)では、「小品集」の特色を「お父さん、お母さんの思い出」との比較検討によって、構成・内容・表現方法において明らかにした。

その結果、「小品集」の構成は「思い出」と基本的に類似していた。この類似は、二十年の時を経ても松下冷子の両親に対する記憶とイメージが、構造的に変化していない事実を示している。ただし、「思い出」に対して「小品集」には、両者の類似した構造からはみ出た随筆がある。これをどう考えればよいのか。ところで、随筆には両親に直接関係する記述は少なく、むしろ彼等の思い出に連なって想起される出来事が多く扱われている。要するに、随筆は「小品集」の構造に対してではなく、内容において検討することが適切なのである。したがって、随筆を含めて「小品集」の構造は、基本的に「思い出」との類似性を保っている。

それに対して、「小品集」の内容と表現方法では、「思い出」からの変化が顕著であった。たとえば、「父の背」（「小品集」）の内容を、「父の思い出」（「思い出」）と比較して検討した。その結果、「父の思い出」は「散文で、……父だけが中心におかれ、……時々の彼の振る舞いを細かく描写しながら描かれていた」のに対して、「父の背」では「父は様々な情景（大文字の送り火・萩の花びら・句碑と赤とんぼ等）の中に」思い出されていた。しかも「小品集」全体で見ると、このような内容の変化はさらに進んでいる。すなわち、「湖の季」では情景だけが、「過ぎし時 今」では出来事だけが扱われていて、父も母も登場しない。同様に随筆においても、「世界に一つだけのプレゼント」を除いて、父母は現れない。しかも、これ等の作品はすべて、「父母召天二十年二十一年の記念会に合わせ、……今回の企画の趣旨に沿うもの」として、選択されている。表現方法においても、内容と類似した変化が現れている。すなわち、「母の思い出」（「思い出」）が「散文で母の生き方と最期を具体的な振る舞いを交えながら、そのために生き生きとした臨場感を伴わせて表現」していたのに対して、「母のまなざし」（「小品集」）は「短歌でホームに吹く風・大文字の送り火・桐だんすなどを登場させながら、感覚的で詩的な絵画的な世界の中に母の存在と生き方へのいとおさを謳っている」。表現方法に認められるこのような変化も、「小品集」の全編に広く見出される。

したがって、「小品集」は二十年前に書かれた「思い出」と類似した構造を保ちながらも、内容と表現方法では大きく変化させている。この変化は一体何であり、これをもたらしたものは何なのか。この課題に関して、一つだけ確かなことがある。それは二十年という時の経過において、松下冷子の心に生じていた動きがこのような変化をもたらしたという事実である。そこで直接には松下冷子の心とその深層に広く深く横たわる近江人の心、さらには日本人の心が問題になる。

第二節 日本人の心とイメージ^⑧（心的表象）の昇華

(一) 方法論的問題をめぐって

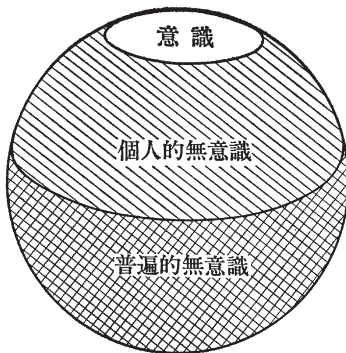
問題を広くとらえれば、日本人の心が課題となる。しかし、ここでは日本人の心全般を考察する必要も筆者の能力もない。課題は「思い出」から「小品集」への変化、及び「小品集」を深く理解するために必要な心に関する洞察である。そこで、ユング (Jung, C.G., 一八七五—一九六二) における「意識と無意識」に関する見解を援用して、「小品集」を生み出した心について考察する。さらに、「生み出した心」に対応する生み出された作品の基本的な性質を「イメージの昇華」と考えて、これについても検討する。

ユングによると、人間の心は「意識と無意識の層」によって構成され、さらに無意識は「個人的無意識と普遍的無意識」に分けることができる。(参照 図一) これら三つの層について、ユングは定義している。

(一) 意識。

(二) 個人的無意識。これは第一に、意識内容が強度を失って忘れ
たか、あるいは意識がそれを回避した（抑圧した）内容、および、
第二に意識に達するほどの強さを持っていないが、何らかの方法
で心のうちに残された感覚的な痕跡の内容から成り立っている。

(三) 普遍的無意識。これは表象可能性の遺産として、個人的では
なく、人類に、むしろ動物にさえ普遍的なもので、個人の心の真
の基礎である。^⑨



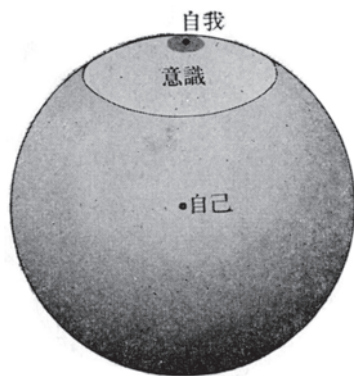
図一 人間の心の三層
(河合隼雄『ユング心理学入門』93頁より)

ユングはさらに意志的主体として生きる人間に即して規定するために、意識の中心に「自我 (ego)」を、意識と無意識を含んだ全体性の中心として「自己 (Self)」を考えた。(参照、図二)

ユングによる心の定義に基づくと、「思いつ」から「小品集」への移行、及び「小品集」を生み出した松下冷子の心について、何を洞察できるのか。まず、松原栄と松原武夫が召天して間もなくまとめた「思いつ」を執筆した心についてである。すでに見たとおり、「思いつ」の内容は父母の「折々の振る舞いを細かく描写し」、その表現方法は散文で「生き生きとした臨場感」を持たせていた。このような内

容や表現方法に対応する心は、意識の層にあり、その中心に自我がある。それに対して、「小品集」の内容は「様々な情景の中に」両親を置き、その表現方法は短歌と随筆で、「感覚的で詩的で絵画的な世界の中に」両親を思い起こしていた。このような内容や表現方法に対応する心は、意識と無意識の層を統合した全体性であり、その中心には自己がある。その際、短歌の「湖の季」に顕著に見られるように、「近江人の心」が松下の無意識の層には広く横たわっている。したがって、「思いつ」から「小品集」への移行においては、意識から意識と無意識を統合する全体性への心の移行が認められ、「小品集」は自我と自己との豊かな対話を通して、研ぎ澄まされた作品となっている。¹⁰⁾

作品を生み出す時の心が自我から自己へと移行していった時に、生み出された作品にはどのような特質が伴っ



図二 自我と自己
(河合隼雄『ユング心理学入門』221頁より)

たのであろうか。人間Aの人間Bに対するイメージと認識を事例として考えてみる。Aはまず、意識の層におけるイメージでBを認識する。その後、両者が対話を重ねることによって、AはBに対するイメージを絶えず新たにしながら、Bを認識する。その際、AはBの古くなったイメージや記憶を、次々と無意識の層に移動させていく。Bとの対話関係が長く続くと、Aの全人格の中に様々な側面を持ったBのイメージが豊かに宿されることとなる。ところがある時突然に、AがBとの対話を完全に断たれるとどうなるのか。¹¹ 松下冷子の「思い出」から「小品集」に至る二十年間に起こっていた事態も、彼女が両親との対話から全く外された状態である。その二十年の間に、作品を生み出した松下の心は自我から自己へと移っていった。この移動に対応して作品に生じたのが、「イメージの昇華」である。たとえば、『小品集』の「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」に、次の一句がある。

母の描きし雛の画かけて二十年いよよ穩おだしきまなざしを思う

母栄が召天した時以来、松下が「母の描きし雛の画」を見ない日はなかった。¹² 雛の画を見ては母に呼びかけ、母を思い、ますます鮮明に母のまなざしが穏やかに思われた。ここに起こっていた事態は一体何なのか。それは松下の自我が一枚の画を介して、彼女の全人格の中に広く深く横たわる母栄のイメージをも含んだ心の中心にある自己と、対話し続けていた事実である。そのために、表現する者の心が自我から自己へと移っていった時に、表現された作品である「小品集」には、「父母のイメージの昇華」が起こっていたのである。

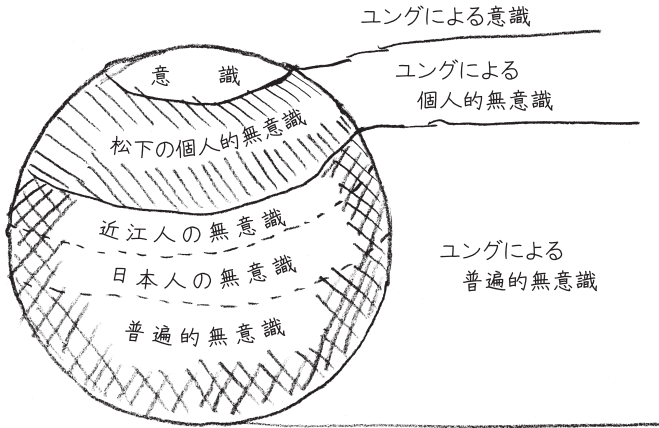
(二) 近江人の心⁽¹³⁾

松下冷子の心を特色づける近江人の心とは何なのか。⁽¹⁴⁾ ユングによる心の構図である「意識・個人的無意識・普遍的無意識」(図一)に当てはめると、図三にあるように近江人の心は普遍的無意識の上層部にあり、それを含んでさらに深く日本人の心があると考えられる。ところが、図三は松下の心の有り様を必ずしも的確にとらえているとは言えない。彼女の個人的無意識には色濃く近江人の心があり、この事実を彼女自身しっかりと自覚しているからである。したがって、図四にあるように「個人的無意識」を「近江人松下の無意識」とすることが、より彼女の心に即していると思われる。

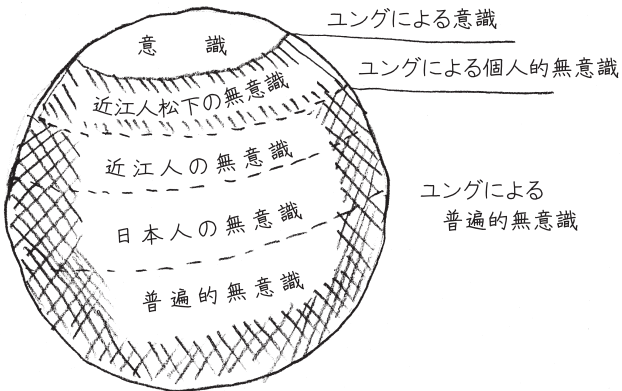
それでは、近江人の心を形成してきたものは何なのか。それは数千年あるいは一万年を越える長い年月をかけて形作られてきたものであるが、第一の要因として琵琶湖を初めとする自然環境をあげることができよう。武田栄夫は、『近江気象歳時記』⁽¹⁵⁾で湖国滋賀県の気象情報を四季に分けて詳細に説明しながら、この地域に生きる人々の生活にも折々に触れている。彼は「あとがき」で、次の通り記している。

「湖国」といわれる滋賀県は、内陸部にありながら雪が深く、ここを走る、「日本の大動脈」と呼ばれる交通網が悩まされるのも、しばしばのことである。一方、山紫水明のこの地は、古くから和歌に詠まれ、『万葉集』をはじめ、幾多の文化遺産に、その自然美が描かれてきた。

本書では、季節を追って、移ろいゆく自然の姿と人々の営みを、気象歳時記として書き綴った。⁽¹⁶⁾



図三 (仮説1) ユングの心の構図に当てはめた松下冷子の心



図四 (仮説2) 近江人松下冷子の心の構図

第二の要因として、近江を舞台にした人々の生活と歴史的出来事がある。「滋賀の文学地図」¹⁷の編集者は、「あながき」で次の通り記している。

取材の過程でいまさらながら気づいたのは、琵琶湖をはさんで湖北、湖東、湖南、湖西と滋賀県の歴史、風土は実に表情豊かだということです。古くは大陸から大和へ至るコースに渡来文化のあとも色濃く残っています。戦国時代はいたるところが戦場となり、おびたしい人間ドラマが集積されました。比叡山をはじめとする多くの社寺や琵琶湖の水は現代もお格好の舞台となっています。文学を語る時、この地の「時間」と「空間」はただ限りなく深いようです。¹⁸

さて、『滋賀の文学地図』は滋賀県の各地を舞台にした文学作品五十冊を紹介している。これらを大まかに題材ごとに分けると、三種類の作品に分類できる。水上勉『湖の琴』・戸村繁『筏』・国松俊秀『ホテルの町通信』などは、近江に生きる人々を扱っている。辻邦生『安土往還記』・邦光史郎『幻の近江京』・徳永真一郎『瀬田の唐橋』などは、近江を舞台にした歴史的出来事を題材にしている。深田久弥『日本百名山』・司馬遼太郎『歴史を紀行する』・麻生磯次『芭蕉物語』などは、外部の人たちが滋賀県の自然と文化に抱いた愛着を作品にしている。このように様々な側面から近江を題材にした作品をまとめることによって、「滋賀県の歴史、風土は実に表情豊か」なことを証言している。

ところで、近江人の心に深く根ざした作品を次々と発表した画家がいる。三橋節子である。¹⁹梅原猛は彼女の作品

を三期に分けた上で、第三期を「伝説画の時代 昭和四八年から死の時まで」としている。「伝説画」とは「近江むかし話」に基づく絵のことで、三橋は第三期に「近江むかし話」から題材を得て多くの作品を発表している。次の通りである。

- 一 「湖の伝説」⁽²⁰⁾ 一九七三年一月
- 二 「田鶴来」⁽²¹⁾ 一九七三年九月
- 三 「三井の晩鐘」⁽²²⁾ 一九七三年九月
- 四 「鷺の恩返し」⁽²³⁾ 一九七三年十月
- 五 「羽衣伝説」⁽²⁴⁾ 一九七四年三月
- 六 「湖の伝説」⁽²⁵⁾ 一九七四年四月
- 七 「三井の晩鐘」⁽²⁶⁾ 一九七四年四月
- 八 絵本『雷の落ちない村』⁽²⁷⁾ 一九七四年七月
- 九 「花折峠」⁽²⁸⁾ 一九七四年九月
- 一〇 「雷獣」⁽²⁹⁾ 一九七四年九月
- 一一 「花折峠」⁽³⁰⁾ 一九七四年十月
- 一二 「余呉の天女」⁽³¹⁾ 一九七五年一月

なお、梅原猛は「三橋節子の語るもの」(『三橋節子画集』一一三—一二三頁)において、「近江むかし話」とそれに題材を得た三橋の作品との関わりを次の通り記している。

彼女は、『近江むかし話』にのせられている深く暗い話を、自分のもつとも深い魂の底でうけとめたのである。いいかえれば、彼女は、『近江むかし話』に出てくるあらゆる人間を、現在の己れにあてはめて見た。すると、今の自分と同じような、深い悩みをもつ人間がいるのではないか、人間のみではなく、そこで語られる龍女や、天女や、鶯や鶴も、また彼女と同じような、深く、悲しい心をもっているのではないか。

こうして『近江むかし話』の主人公は、恐ろしいほどの迫力でもって生き返ってくるのである。おそらく、『近江むかし話』をつくった老人クラブの老人たちも、彼等が集めたむかし話に、このような深い意味が隠されていると思わなかったであろう。忘れられた近江のむかし話が、三橋節子の絵によって現代に、生き生きとよみがえった⁽³²⁾ともいえる。

若くして死に直面した画家三橋節子は、おそらくそれ故に、『近江むかし話』に秘められていた「近江人の心」の深層に深く鋭く向き合うことができた。だから、わずかに残されていた地上の生涯において、「近江のむかし話が、三橋節子の画によって現代に、生き生きとよみがえった」のであろう。

(三) イメージの昇華

作品に向かう作者の心が、自我に強く束縛された世界から豊かな自己との対話による変化に対応して、作品に現れる特色が「イメージの昇華」であった。この特色は、松下冷子の場合、次の二点に要約できた。

一 松下冷子の「お父さん、お母さんの思い出」と、それから二十年ほど後に書かれた「小品集」を比較すると、後者に「イメージの昇華」が認められる。

二 したがって、「小品集」は「イメージの昇華」を特色とした作品である。

ところで、「イメージの昇華」とは「イメージが純化されていくことに伴い、それがより抽象的で、普遍的な表現を採る」ことであるが、どのような観点から「イメージの昇華」を検討できるのか。この課題に貴重な手掛かりを与えているのが、「近江人の心」を題材にした一連の三橋節子の作品である。梅原猛は「三橋節子の語るもの」において、三橋の絵に向かう動機と作品の持つ普遍性について書いている。

彼女にこのような絵をかかしたものは、愛であると同時に、煩惱であったと思う。あるいは愛といっても煩惱であるといっても同じ意味かもしれない。この世に、何か残しておきたい。この子をはじめとするわが愛する残された人に何かを残しておきたい。こういう煩惱が彼女をして、あのおどろくべきことをなさしめたといえる。

……

こういう方法で彼女は『近江むかし話』から六つの話をとって、それを次々と絵にした。

「三井の晩鐘」「田鶴来」「鷺の恩返し」「雷獣」「花折峠」「余呉の天女」の六つの話である。

かつて柳田国男は、日本の民話の中には、現代の小説家が書いた小説よりもはるかに深い人生の真相が隠されているといった。彼女は、おそらくこの柳田国男の言葉を知らなかったであろうが、彼女の絵は、この柳田国男の言葉が真実であることを証明してくれたのである。⁽³³⁾

「彼女にこのような絵をかかしたものは愛と同時に煩惱であった」ことと、『近江むかし話』から六つの話をとって、……はるかに深い人生の真相」を表現したことの間は何があるのか。「愛と同時に煩惱」は、三橋を絵に向かわせた根本動機である。他方、「はるかに深い人生の真相」は、『近江むかし話』に秘められている長年にわたって蓄積された近江人の心であり、それは近江人の心の深層に横たわる普遍性である。彼女はこの近江人の心の普遍性を題材として取り上げ、そこに三橋の根本動機を注入した。こうして完成した絵は近江人の心に共通する情景を描き出しながらも、極めて個性ある作品となった。そこで、完成した三橋の作品を「イメージの昇華」との関連から考察すると、表現された「近江人の心」が「イメージ」に通じる。他方、三橋の根本動機であった「愛と同時に煩惱」は、作品に個性を与えたばかりでなく「作品の焦点」となっている。したがって、作品に認められる「イメージ」と「焦点」から、作品における「イメージの昇華」を考察することができる。

第三節 近代日本の人間像を探る

(一) 松下冷子「小品集」におけるイメージと焦点

そこで、「イメージの昇華」を特色とする松下冷子「小品集」において、使用されているイメージが何であり、作品の焦点として何が用いられているのかを、短歌「父の背」と「母のまなざし」において見ておきたい。

まず、作品のイメージとして使用されているのは、次の通りである。

風景（萩こぼれ小紋のさまに石だたみ・送り火の夜・茜さす比叡湖面に揺るる・夜さの雨に濡れ赤とんぼ一

つ・湖の青・父母の星瞬く）

年月（父言いてより五十年）

人々（大津祭・学園のどよめき）

意志（子々孫々に平和を願いし父母）

母（母の香・母のまなざし・おしゃれに装う母・母の温もり・母の眼差し・母の笑む顔）

生き方（捨て難く・節の川に癒されしや・年重ねることも恵み・語りたきこと多し）

次に、作品の焦点として用いられているのは、次の通りである。

言葉（「平和記念日」・翌松のごとく伸びよ・「星に願いを」・「鴨川に似る」）

意志（竜が丘に父通いし・父の句碑・創立記念

句碑・母の意）

姿（メモとる老父・帰りゆく父後背）

場所（待ち合わしたるホーム）

生活道具（銃痕の傷残る桐たんす）

花（紫の鉄仙ほころべば・紫の鉄仙は小粋に八

重の白・鉄仙今年も咲き揃う・こぼれんかり

種を抱けるひまわり・鉄仙）

風景（大文字の送り火）

事件（テロ爆破事件）

さて、イメージは月日の経過に伴って抽象化される傾向があるので、松原武夫と栄の場合、彼等のイメージは一方では、近代日本を生きた人間像のモデルとなる。他方、地域性に注目するならば、それは近江人の心に広がるイメージに吸収されていく。ところで、「父の背」と「母のまなざし」で使用されているイメージには、顕著な違いがあった。この違いは注目に値する。すなわち、松原武夫に関連して使われていたイメージは、すべて「風景・年・人々・意志」の分類に属し、これは情景とそれに付随している。それに対して、松原栄を謳った短歌で用いられていたイメージは、すべて「母・生き方」に含まれる。これらのイメージは人間の抒情的な世界を表現している。



滋賀里の自宅の庭で 1979（昭和54）年6月5日
『金扇』より

短歌が描き出す世界全般を「イメージ」が表現しているのに対して、作者が作品制作にあたって思いを集中する一点が「焦点」である。松下「小品集」の焦点には、松原武夫と松原栄の言葉や生き方が典型的に示しているように、彼等の生き方が表現されている。要するに、作品のイメージが近江人の心に吸収されていくのに対して、焦点は彼らが一人格者として生きた真実を証言するのである。なお、焦点においても両者に違いを認めることができる。松原武夫を謳う短歌の焦点として使われているのは、「言葉（ほとんど）・意志（ほとんど）・姿・事件」の分類に属する。これらは、自らの意志をもって近代日本を生きた武夫の姿を浮かび上がらせている。それに対して、松原栄の場合、焦点は「場所・生活道具・花・風景・言葉（一部）・意志（一部）」に属する。これらからは、生活者として生き、そこにおいて花を愛し、人生を語った栄の姿を読み取ることが出来る。

(二) モデルとしての父 松原武夫

松下冷子「小品集」が描き出す松原武夫は、作品のイメージと焦点の双方から総体として検討するのがふさわしい。作品のイメージは、抽象化を通して近江人としての普遍性に近づいていく傾向があった。他方、作品の焦点は松原武夫の人格性を保っていた。したがって、イメージと焦点の両方を組み合わせて考察することにより、一人格者として人間の心をもって生きた人間像を対象にできる。さらに、とりわけ焦点には近代日本という時代性が刻印されていた。そのために、松下「小品集」における武夫を総体として検討することにより、近代日本を生きた人間像を提示できるのである。

そこで、先に「父の背」から取り出した松原武夫のイメージと焦点に連なる要素を「小品集」から抽出して、近

代日本を生きた人間像のモデルとして、松下冷子が描いた父松原武夫を考察したい。抽出したイメージと焦点は、次の通りである。

「父の背」とそれに連なるイメージ

風景（「父の背」より 萩こぼれ小紋のさまに石たたみ・送り火の夜・茜さす比叡湖面に揺るる・夜さの雨に

濡れ赤とんぼ一つ・湖の青・父母の星瞬く、「湖の季」より 朝茜の湖に別れを惜しむごと・琵琶湖をサ-

ーモンピンクの風が掃き・道の辺の淡く萌え初め・駆け上がる水鳥の舞・淡紅にかすむ湖畔の並木道）

年月（「父の背」より 父言いてより五十年、「過ぎし日 今」より 胸衝く歴史を・鎮魂のドームと向き合う

重き八月）

人々（「父の背」より 大津祭・学園のどよめきに、「過ぎし日 今」より 沖繩の悲しみの歌声）

意志（「父の背」より 子々孫々に平和願ひし父母、「過ぎし日 今」より いい風よ吹いて下さい迷わずに）

「父の背」とそれに連なる焦点

言葉（「父の背」より 「平和記念日」・翌松のごとく伸びよ・「星に願いを」、「過ぎし日 今」より じっちゃん

んは艦砲射撃にもあいしと）

意志（「父の背」より 竜が丘に父通いし・父の句碑・創立記念句碑、「過ぎし日 今」より 熱き眼差し、「父

母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より 父の跡踏みしめ歩く）

姿（「父の背」より メモとる老父・帰りゆく父後背、「湖の季」より 駆ける人そぞろゆく人・手を振り歩く）

事件（「父の背」より テロ爆破事件、「過ぎし日 今」より テロありて）

「父の背」で用いられている「情景とそれに付随したイメージ」とは、どのようなものなのか。まず、「情景のイメージ」から検討する。「萩こぼれ小紋のさまに石だたみ」と「送り火の夜」は、文化としての性質を帯びた自然である。すなわち、石だたみや送り火には人の手が加わっている。しかし、この情景では加えられた人の手はほとんど自然に溶け込み、自然と一体となったイメージを演出している。それに対して、「茜さす比叡湖面に揺るる」、「夜さの雨に濡れ赤とんぼ一つ」、「湖の青」、「父母の星瞬く」は、詩人の心を通して表現された自然である。なるほど対象は自然そのものであるが、作者によってその自然はさまざまな文化的装いを施されて、読者の前に提供されている。このようにして謳われた情景のイメージは、時として移ろい行く様への感傷を交えながら、人間に対して優しい安心の世界を映し出している。風景に付随した「年月・人々・意志」で用いられているイメージには、大別して二つのテーマがある。平和への願い（「子々孫々に平和願ひし父母」など）と、学園に学ぶ学生たち（「学園のどよめきに」）である。これらは背景として退き風景に融けこみながら、イメージを焦点と繋いでいる。

次いで、「父の背」における焦点である。焦点には、「平和への願い」（「平和記念日」・テロ爆破事件）、「教育への情熱」（翌松のごとく伸びよ・竜が丘に父通いし・父の句碑・創立記念句碑）、「父の姿」（メモとる老父・帰りゆく父後背）の三つがある。「平和への願い」における松原武夫は、「じっちゃん艦砲射撃にもあいしと」「テロありて」（「過ぎし日 今」と、いつの時代にも止むことのない戦いの現実を交えながら、だからこそ平和への願い

を強くしている。⁽³⁵⁾「教育への情熱」で、松原武夫は学生に呼びかけた「翌松のごとく伸びよ」に端的に見られるように、全人格を注いで教育に打ち込んでいる。⁽³⁶⁾だから、松下は教育者松原武夫を偲びつつ、「父の跡踏みしめ歩く」(「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より)のである。このように、他者への呼びかけを特色とする「平和への願い」と「教育への情熱」は、公人として生きた松原武夫像を浮かび上がらせている。それに対して、「父の姿」は、老いてなお好奇心をもちつづけ(メモとる老父)、母への想いのにじみ出る後ろ姿(帰りゆく父後背)は、私人として折々の心をもって自由に豊かに生きた姿を見せている。

そこで、松下冷子「小品集」における父松原武夫の全体像を捉えることができる。松原武夫を題材とした作品が浮かび上がらせる昇華されたイメージは、近江人の心が育んできた情景である。この風景の中心には琵琶湖があり、地域的特色を持つ。それは細やかで優しく、人を安心の世界へと包み込んでいる。このように豊かな情景のイメージを背景にして、松原武夫像は置かれる。彼は、私人としては幼児より変わることのない積極性と繊細さを持ち、公人としては明確な立場に立って他者への情熱を注いだ人物として描き出される。これらを総合することによって、松原武夫は近代日本を生きた人間像のモデルを提供している。

(三) モデルとしての母 松原栄

「母のまなざし」における松原栄に連なるイメージと焦点は、「父の背」での松原武夫のそれとは、質的にも内容的にも異なっていた。この違いに向けた問いは、近代日本を生きた人間像のモデルとして母松原栄を考察する上で重要な意味を持っている。そのことを踏まえた上で、まず「母のまなざし」から取り出した松原栄のイメージと焦点に連なる要素を、「小品集」から抽出する。次の通りである。

「母のまなざし」とそれに連なるイメージ

母（「母のまなざし」より 母の香・母のまなざし・おしゃれに装う母・母の温もり・母の眼差し・母の笑む顔、「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より いやよ穏しきまなざしと思う・桜風やさし）

生き方（「母のまなざし」より 捨て難く・節の川に癒されいしや・年重ぬることも恵み・語りたきこと多し、

「過ぎし日 今」より 三歳の味覚おぼろにさぐりつつ・大豆御飯金の粒ぞや一粒ひとつぶ・賑やかなりし一汁粗食・挿し芽してまた挿し芽して三十年、「世界に一つだけのプレゼント」より 一晚中ミシンをかける姿）

「母のまなざし」とそれに連なる焦点

言葉（「母のまなざし」より 「鴨川に似る」）

意志（「母のまなざし」より 母の意）

場所（「母のまなざし」より 待ち合わしたるホーム）

生活道具（「母のまなざし」より 銃痕の古傷残る桐だんす、「過ぎし日 今」より 円き卓袱台）

花（「母のまなざし」より 紫の鉄仙ほころべば・紫の鉄仙は小粋に八重の白・鉄仙今年も咲き揃う・こぼれんばかり種を抱けるひまわり・鉄仙、「湖の季」より 芽吹き初むメタセコイヤ、「過ぎし日 今」より ラベンダー枯れぬ・ラベンダーのブーケ・紫鉄仙色濃く咲きぬ、「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より 紫鉄仙の小さきつぼみ、「わたしの花人生」より 「宗悦きく」）

風景（「母のまなざし」より 大文字の送り火、「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より 母の描きし
雛の画かけて二十年）

まず、「母のまなざし」で用いられた二つのイメージ、「母」と「生き方」の内容を検討しなければならない。ところで、その前に避けることのできない課題がある。松原栄を謳う短歌の多くで、「母」は焦点ではなく「イメージ」に分類されている。ここにはどのような事情があるのか。「母の香」の場合で見ておきたい。

いくたびか待ち合したるホームに立てば肩越しの風母の香のする

この短歌の焦点は、「待ち合したるホーム」である。松下がそのホームに立っていると、吹き抜けていく肩越しの風があった。なぜかその風に「母の香」がして、彼女は懐かしく母を思い出している。この短歌のように、作者が「場所・生活道具・花」などに焦点を合わせていると、ふっと様々に母が思い出される。このような場合、母は焦点ではなくイメージに分類される。

さて、イメージに分類された「母」は、基本的に「母の存在そのもの」（母の香・母の温もり）を表現する。母が、自分や他者を意識している場合（母のまなざし・おしゃれに装う母・母の笑む顔）もある。「いよよ穏しきまなざしと思う」「桜風やさし」（「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より）は、「母のまなざし」におけるイメージを補っている。もう一つのイメージである「生き方」も、二種類に分類される。生活の重荷を負い、苦勞の

ただ中にいる母の生き方（捨て難く・節の川に癒されいしや）と、歩んできた道を振り返った時の感慨（年重ねることも恵み）である。「三歳の味覚おぼろにさぐりつつ」「大豆御飯金の粒ぞや一粒ひとつぶ」「賑やかなりし一汁粗食」（「過ぎし日 今」より）と「一晚中ミシンをかける姿」（世界に一つだけのプレゼント）より）は、前者に属する。「挿し芽してまた挿し芽して三十年」（「過ぎし日 今」より）は、後者に属する。このように琵琶湖を中心にした風景という父松原武夫のイメージに対して、母松原栄のそれは母そのものである。これは何を語っているのか。おそらく、松下冷子にとつて母はきわめて近くにあり、そこにおいてはいつも安らぎがあり、そこだけは裏切られることのない全幅の信頼を寄せ、彼女は生きるすべもまた母の生き方から学んだ。いわば松下が心の拠り所とする世界、それが母であった。だから、母は情景とならぶイメージとなったのである。しかも、昇華された母のイメージが情景と並んで心の世界を構成することは、近江人の心にも普遍的に認められると思われる。⁽³⁸⁾

そこで、「母のまなざし」における焦点に関する考察である。最も多く焦点として用いられているのは花であり、それらは様々な表情を持っている。ただ存在だけを記されているもの（鉄仙）、咲いている様子（紫の鉄仙ほころべば・紫の鉄仙は小粋に八重の白・鉄仙今年も咲き揃う）、多くの種を抱くひまわり（こぼれんばかり種を抱けるひまわり）である。他の作品によっても、花の多様な表情は補われる。木と花の生命力（芽吹き初むメタセコイヤ「湖の季」より・紫鉄仙色濃く咲きね「過ぎし日 今」より）、死（ラベンダー枯れぬ「過ぎし日 今」より）、



松原栄「二人小芥子」
『金扇』より

プレゼント（ラベンダーのブーケ「過ぎし日 今」より）などである。それにしてもなぜ、花が焦点としてこれほどまでも多く使われ、しかも、折々の花の表情が登場するのか。この問いに対する手がかりは、「宗悦きく」（「わたしの花人生」より）と名付けられた小菊にある。松下は四十年間大切に守り続けてきた小菊に、恩人の名前「宗悦きく」を付けて育てた。その四十年間に何度小菊に向かって「宗悦きく」と呼んできたか、分からない。名前を呼び呼ばれる関係、ここに人格関係が生まれる。花の人格化である。松下は焦点として多く花を用い、折々の花の様子に触れる。そこにも花の人格化が生じており、それゆえに松原栄を初めとした人々の類比として、花を用いているのである。「花鳥風月」に見られる日本人の心の世界がここにはある。次に、焦点として用いられた、「言葉・意志・場所・生活道具」である。これらはいずれも、「松原栄の生活模様」にまとめることができる。すなわち、栄の生活そのもの（「鴨川に似る」・銃痕の古傷残る桐だんす、円き卓袱台「過ぎし日 今」より）、買い物（待ち合わせたるホーム）、生活者への想い（母の意）である。栄への回想を内容とする「風景」（大文字の送り火、母の描きし雛の画かけて二十年「父母召天二十年二十一年記念会に寄せて」より）も、「栄の生活模様」に大別できる。したがって、焦点は「人々への類比として用いた花」と「栄の生活模様」に分類できるが、両者の関係はどのように考えられるのか。前者は栄を初めとする人々一般を、後者は松原栄だけを対象としている。ここに違いがある。しかし、いずれも生活する人々を扱っており、ここに共通性を見ることも出来る。

このように考察を重ねた結果、松下冷子「小品集」が描きだす母松原栄の全体像を示すことが出来る。松原栄を扱った作品における昇華されたイメージは、母の存在を根底においていた。この根底から空気のようににじみ出てくる安らぎ・安心・平安の世界がそのイメージであり、これもまた近江人が育んできた心の世界に通じる。どのよ

うな状況においても変わることのない心の世界を背景にして、松原栄像は置かれる。それは日本人の感性が育んだ詩人の心で、たとえば折々の花などを用いて、松原栄と人々の姿を表現している。生活者であった松原栄の姿は、同じ時代を生活した人々と重なるからである。したがって、松原栄は激動した近代日本において、揺るぐことのない平安をもたらした母のイメージを背景として、それぞれの課題を担って生きた生活者のモデルとなっている。

おわりに

松下冷子「小品集」が描く松原武夫・栄と、二十年程前の作品「お父さん、お母さんの思い出」（『追想』所収）における松原武夫と栄の間に認められる明らかな違い、この違いに向けた問いから考察を始めた。

その結果、これら二つの作品における相違に関して、二つの側面からの事実が明らかになった。一つは二十年という年月を経て、書き手の心の中に生じていた変化である。松原栄と武夫の死後間もなく書いた「お父さん、お母さんの思い出」で、作者の自我は意識の中に残る鮮明な記憶を記した。そのために、生き生きとした具体的な記述となった。それに対して、二十年後の「小品集」で作者は心を静め思いを深めることによって、自我は自己（無意識の層を含む心の中心）と親密な対話を重ねながら、松原武生と栄を書いた。ここで重要な手掛かりは、松下の無意識の層には近江人の心が重なっている事実である。そのために、深く沈潜して自己と対話した時、松下は近江人の心という装いをまとうことになった。作者の心に生じたこの変化は、もう一つの側面である作品の変化となった。作品に表現された変化は、「イメージの昇華」として捉えられる。そこで、「小品集」におけるイメージの昇華を具体的に「作品のイメージと焦点」という二つの観点から考察した。

すると、松原武夫を扱った作品のイメージには近江の風景（それは近江人の心に重なる）があり、その中に公人であり私人でもある松原武夫の全人格が、近代日本という時代的性格を伴って置かれていた。これが、近代日本を生きた人間像のモデルとしての松原武夫である。松原栄の作品が浮かび上がらせるイメージは、母なる安心の世界（これも近江人の心に重なる）であり、その中に置かれたのは生活者松原栄を比喻する折々の時期の花などであった。

松原武夫先生と栄さん夫妻と出会い、教会生活を共にしたのは、大津教会伝道師として働いた一九七九（昭和五四）年四月からわずか二年間に過ぎない。しかし、今回の作業を通して、それは豊かで深い人格的な交わりに満ちた二年間であったと、改めて気付かされた。松原栄さんはあの笑顔を浮かべながら天国から、「塩野先生、私たちは、このことを書いて下さってご苦労さま」とねぎらって下さる声が聞こえて来るように思える。松原武夫先生からは、「塩野先生、私の教育者としての姿勢については、もう少しこういう点も書いてもらいたかったですな」と注文される声が聞こえてきそうである。

注

- (1) 参照、松原広志「あとがき」〔追想〕二八〇—二八三頁
- (2) 松下冷子「お父さん、お母さんの思い出」〔追想〕一三三—一三八頁
- (3) 松下冷子、前掲書、一三八—一四三頁
- (4) 「第一段落 父の思い出」と「父の背」との内容比較によって、どこまで全文の内容比較に資するのかが問題である。この点に関しては、いずれもそれぞれの冒頭に置かれた主要な作品であるので、十分な妥当性を想定できる。

- (5) 「父の背」の内容に関しては、本稿の「第一章 松下冷子『小品集』解題」の「第一節 短歌」を参照。
- (6) 「第二段落 母の思い出」と、「母のまなざし」の表現方法を比較する妥当性に関する問題がある。これについても、それだけが主要な作品であることから、有効性を推定できる。
- (7) 「母のまなざし」の表現方法については、本稿の「第一章 松下冷子『小品集』解題」の「第一節 短歌」を参照。
- (8) イメージは「人が心に描き出す像や情景など」（精選版『日本国語大辞典』で、「心的表象」などと訳されている。ただし、一般には広く「イメージ」という用語が定着して用いられている。そこで、本稿においても「イメージ」を使った。
- (9) Yung, C.G., *The Structure of the Psyche*. C. W. 8. pp.151-152. (河合隼雄『ユング心理学入門』九四頁)
- (10) 冷泉為人は、「日本人のこころ」と題した講演で、「まず『日本人の心』『美的感性』あるいは『自然観』さらには『日本人の資質』といったものを象徴するものひとつに、私は『枕草子』あるいは『拾遺愚草』がある」とした上で、「非常に細やかなところ、細やかにあるいは繊細に、あるいは微妙なところまで表現している……そういうところが我々日本人の心ではないか、自然観ではないか」としている。冷泉為人「日本人のこころ」(『同志社アーモスト・ニュース』七十一号、二〇一二年、五一―八頁)
- 自然に対する繊細な感性は、松下冷子「小品集」にも通じる。
- (11) 松原武夫の「写真はものを言わない」は、まさに長年にわたり対話を続けてきた相手の口から発せられた言葉である。参照、松原広志「父と母の思い出」(『追想』一七五頁)
- (12) 松下冷子は、何枚かの母の形見の画を季節毎に和室にかけている。「雛の画」は、毎年二月半ばから三月半ばにかけて一月間ほどかけている。
- (13) 滋賀県を、ここでは近江と表記している。この地域を故郷とする人々の心が、近代以前に近江と呼ばれた時代から続く、長く豊かな歴史を継承して作られているからである。
- (14) 松下冷子の手記に、滋賀県について次の通りある。「滋賀県は父母の故郷でした。そして私も生地松江よりも琵琶湖が故郷となりました」。
- 二〇一二年六月から十月にかけて松下が琵琶湖を謳った短歌がある。
- リアス式「湖の辺の道」の尾根歩く木の間に透る湖の青さよ (琵琶湖最北端)
斜度六十度二百米一気に入る湖の辺に菅浦の集落並ぶ (琵琶湖最北端)
最長の「木簡」発掘されし塩津浜水運業者の威厳を証す (平安後期の流通実態)

- 稚魚群れる湖の辺の入江巡り来て突と広がる永遠なる琵琶湖
ひたすらに波しぶき避け歩きたり視界けぶれる琵琶湖は海か (海津、雨の日)
- 湖西より望む伊吹の雄々しかりふところに小さき竹生鳥いだく (今津浜、湖南の我家から見る伊吹は丸いのです)
- 琵琶湖一周二百二十キロ遂に完歩す小さき証書なるも大きな宝に (二〇一〇年十月～二〇一二年十月)
- (15) 武田栄夫『近江氣象歳時記』サンブライイト出版、一九八〇年
- (16) 武田栄夫、前掲書、二一八頁
- (17) 朝日新聞大津支局編『滋賀の文学地図』サンブライイト出版、一九七八年
- (18) 朝日新聞大津支局編、前掲書、二二一―二二二頁
- (19) 三橋節子の作品を中心にまとめられた本がある。
三橋節子『雷の落ちない村』小学館、一九七七年
- (20) 梅原猛編『三橋節子画集』サンブライイト出版、一九八〇年
- (21) 参照、梅原猛編、前掲書、七一
- (22) 参照、梅原猛編、前掲書、七三
- (23) 参照、梅原猛編、前掲書、七四
- (24) 参照、梅原猛編、前掲書、七六
- (25) 参照、梅原猛編、前掲書、七七
- (26) 参照、梅原猛編、前掲書、七九
- (27) 参照、梅原猛編、前掲書、八一―九三、及び三橋節子『雷の落ちない村』
- (28) 参照、梅原猛編、前掲書、九四
- (29) 参照、梅原猛編、前掲書、九五
- (30) 参照、梅原猛編、前掲書、九六
- (31) 参照、梅原猛編、前掲書、九九
- (32) 梅原猛編、前掲書、一一八頁
- (33) 梅原猛編、前掲書、一一六―一一七頁

- (34) 松原武夫と栄の琵琶湖を題材とした俳句にも、同様の傾向を認めることが出来る。参照、「第一章 注二二」。それに対して、三橋節子が描いた琵琶湖は人々が無意識の層にうごめく要素を探り出して、それを深い色彩を用いて表現している。
- (35) 松原武夫と栄が戦争と原爆の悲惨さを謳った俳句については、「第一章 注二七」と「第二章 注五六」を参照。
- (36) 研究者及び教育者としての松原武夫については、「第二章 第三節 (三) 研究者・教育者としての松原武夫」を参照。
- (37) 「老いてな好奇心をもちつづけ」た松原武夫の姿には、少年期の彼を彷彿とさせるものがある。参照、「第二章 第一節 (一) 揺籃の地、近江八幡」
- (38) 近江人の心に母の存在が重要な要素となっている根拠として、本稿の関連では次の事項を指摘できる。三橋節子の一連の絵画における動機、文学では長谷川伸『険の母』（参照、『滋賀の文学地図』四三―四七頁）、松原武夫と栄の俳句（参照、第一章 注二二）。